

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 8月 11日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 立教大学大学院現代心理学研究科心理学攻
博士課程後期課程 1年

氏 名 千葉 元気



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	the 35th annual meeting of the Cognitive Science Society 認知科学学会第35回大会
公式ホームページ URL	http://cognitivesciencesociety.org/conference2013/index.html
開催期間	2013年 7月 31日 ~ 2013年 8月 3日
旅行期間	2013年 7月 29日 ~ 2013年 8月 4日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Humboldt University, Berlin, Germany (ドイツ, ベルリン, フンボルト大学)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	千葉 元気 (立教大学現代心理学研究科心理学専攻) 都築 誉史 (立教大学現代心理学科) 菊地 学 (立教大学現代心理学科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	The construal level theory and the dual process theory in multi-attribute decision making: An empirical examination (多属性意思決定における解釈レベル理論と二重過程理論 : 実証的検討) *申請時と発表題目に変更がありました
補助金額	100,000 円 (内訳 航空券代 125,870 の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、the 35th annual meeting of the Cognitive Science Society への参加に当たりまして、日本心理学会より国際会議等参加費補助金をいただきましたことを、心より厚く感謝申し上げます。以下で、学会での活動、自身の研究発表を含む、参加により得られた成果などについて報告させていただきます。

【活動内容】

報告者らは“The construal level theory and the dual process theory in multi-attribute decision making: An empirical examination (多属性意思決定における解釈レベル理論と二重過程理論：実証的検討)”という演題でポスター発表を行うため、2013年7月31日から8月3日にかけて、ドイツのベルリン、フンボルト大学で開催された the 35th annual meeting of the Cognitive Science Society に参加した。開催地、開催期間などの条件が良かったためか、昨年の国際会議より参加人数も多くにぎわっていた印象を受けた。初日(7/31)はワークショップとチュートリアルが開催された。言語獲得や動機付け、脳神経など分野は非常に多岐にわたっていたが、モデル作成に関する内容が多かった。翌日(8/1)に学会の開催セレモニーが行われ、残りの三日間は、plenary talk、シンポジウム、ポスター発表、シンポジウムの順で行われた。我々は、8/1にポスター発表を行った。

【成果】

1. 報告者らの研究発表

意思決定における非合理的選択に対する研究において、認知的処理の二重性を示す研究結果が多く報告されてきた。二重的な処理を包括的に説明する二重過程理論と解釈レベル理論は、非合理的選択の説明に有効的であるが、一部において対立する。本研究では、一方の認知処理が促進される実験操作を行い、その操作チェックとともに、両理論が想定する2つの認知処理の意思決定課題における影響の程度を、眼球運動と選択率から検討した。結果、意思決定課題において、二重過程理論が想定する認知処理が影響することが示された。

発表時間中、多くの研究者から多くの疑問・意見を頂き、有意義な議論を行うことができた。このたび参加した学会には様々な分野の研究者が多く、異なる分野の研究者からの意見は、異なる目線からの考えを報告者にも与え、自身の研究の深まりだけでなく、研究に対する考えの幅を広げることができた。

2. 参加した研究発表

数多くのシンポジウムが開催され、興味のある内容が同時時間帯に開催されることにとっても頭を悩ませた。そのため、参加した多くは自身の研究領域と同じ内容、または非常に近い内容のものとなった。参加した意思決定に関するシンポジウムでは、意思決定研究におけるモデル作成や、眼球運動測定とその分析などについて学習した。現在報告者らが取り組んでいる研究の方向性が、最先端の研究者らの行っている研究と大きくずれていないことから、今後の研究に対しなにかしらの安心を感じたが、後追いとなってしまっはいけないと自身を戒めた。

全日の参加を通し、最新の研究動向など得るものが多く、また今後の研究へのモチベーションが高まる非常に良い学会だった強く思う。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年8月8日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東北大学大学院 情報科学研究科博士後期課程

氏名 徳吉 陽河



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The Third World Congress on Positive Psychology 第3回 ポジティブ心理学国際会議
公式ホームページ URL	http://www.ippanetwork.org/programs/world_congress/information/
開催期間	2013年6月27日～2013年6月30日(4日間)
旅行期間	2013年6月25日～2013年7月3日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	The Westin Bonaventure Hotel & Suites 404 South Figueroa Street Los Angeles, CA 90071 ウェスティン ボナベンチャ ホテル アンド スイーツ 404 サウス・フィゲロアストリート ロサンゼルス、カリフォルニア 90071
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	徳吉陽河・岩崎祥一 東北大学大学院 情報科学研究科 人間社会情報科学専攻 認知心理学講座
発表題目 ※正式名と日本語訳	【正式名】: Development of a tool and an intervention program based on Cognitive Behavior Coaching (CBC): The relationship between CBC and PGIS-II. 【日本語訳】: 認知行動コーチングに基づいたツールと介入プログラムの開発: CBCとPGIS-IIとの関係性について
補助金額	100,000円(内訳: 交通費, 飛行機代の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

予定通り、6月25日より、仙台から出発し、その日の正午ごろにロサンゼルスに到着しました。その後、国際空港からダウンタウンにあるホテルまで移動し、ホテルから国際会議の会場のルート確認及び視察、その周辺を探索しました。翌日、6月26日、時差の調整のため1日空ける予定でしたが、昨年度、「カルフォルニア州立大学バークレイ校」で高等教育に関わる研修を受け修了しているため、大学の比較と視察及び研究に関わる情報・資料収集のため「カルフォルニア州立大学ロサンゼルス校(UCLA)」に訪問しました。UCLAでは、主に現時点での研究に関連するキャリア・センターなどに訪問して、資料収集しました。その他、主要な施設として、図書館、書店(書籍の購入)、ショップ、学食などの視察を行いました。

6月27日(会議1日目)より国際会議が開催され、朝8:00ごろ受付を済ませ、シンポジウムの入口に許可と確認を得て、ICP2016のポスター(大1枚と小の4枚)をメインとなるシンポジウム会場の入口に設置していただきました。その後、第3回ポジティブ心理学国際会議の2つの実践ワークショップであるPositive Psychotherapy(ポジティブ心理療法;講師Tayyab Rashid)、Mindfulness-Based Strengths Practices(強みのマインドフルネスの実践:講師Ryan Niemic氏)に参加しました。その日の夕方は、ポジティブ心理学の創設者である「セリグマン」教授のProspection and Positive Psychology(ポジティブ心理学の展望)に参加しました。主に、シンポジウムの内容については、主に「創造性(Creativity)」に関わる研究・助成の機関を設立し、研究の支援を行うというものでした。その夜は、レセプションにも参加しました。

6月28日(会議2日目)、ポジティブ感情理論で有名な「バーバラ・フレドリクソン」教授による講演に参加しました。「愛情(Love)」に関連する社会心理学、認知心理学からマインドフルネスへの応用まで先端的な研究について発表が行われており、誠に感銘を受けました。また、この日、ポスター発表1日目の会場では、今回の私の研究にも関わる「Personal Growth Initiative Scale-II(PGIS-II)」の原著者Robitschek教授にお会いできました。PGIS-IIに関しては、メキシコやアフリカ系アメリカ人などの異文化間研究から、PGI教育やカウンセリングによる介入プログラムによる研究などが発表されておりました。今回の私の発表を含め、PGIの国際的な共同研究の発表という形となり、誠に意義があったと感じます。その他、ナラティブ・アプローチ、カウンセリング、コーチングなどのワークショップに参加し、諸外国の研究者の方と討論や意見交換を行いました。

6月29日(会議3日目)、朝7時ごろに、自分自身の発表のポスターを設置しました(1日間提示)。今回のポスター発表のテーマと内容について、特に変更はなく、コーチング心理学(認知行動コーチング)を応用したモデルでの介入研究であり、コーチングやカウンセリングにおいて重要であると考えられる「自己成長主導性(PGIS-II)」の効果について検証するものでした。また、今回、実験で利用したワークシート(質問票)を日本語から英語に翻訳して、岩崎祥一教授らにチェックしていただいたものを資料として追加しました。また、PGIS-IIと「解決指向尺度(SFI)」や「認知に関わる尺度(認知の柔軟性尺度(CFI))」、「自己統制と管理の尺度(SCMS)」との間の関連性など、新しい分析結果も追加して提示しました。また、ICP2016のパンフレット含む「配布資料(Hand Out)」も設置しました。実際の発表では、主に所定の時間となる3時15分から4時15分に、実際のポスターの前で行いました。発表時間に数人の方に質問にきていただきました。また、期間中に、「配布資料(Hand Out)」はすべてなくなり、ある程度、好評を得ることができたと考えます。

6月30日(会議4日目)、この日は、ニュージーランドで起きた地震からの「レジリエンス活動」についてワークショップに参加しました。また、フロー、メンタリング、動機づけ面接法、コーチングなどのシンポジウム・ワークショップなどに参加しました。最後に、フロー理論で著名な「チクセントミハイ教授」による「ポジティブ心理学の未来」について講演が行われ(内容は、臨床社会心理学的な視点)、国際会議の終了となりました。

7月1日は、「南カルフォルニア大学(University of Southern California)」に視察と研究の情報収集のため訪問いたしました。主に研究に関連するキャリア・センターなどに訪問して、資料収集しました。その他、主要施設、書店、ショップ、学食などの視察を行いました。その他、隣接するロサンゼルス・オリンピック遺産であるEXPOパーク(カルフォルニアの歴史、自然館)など視察を行うことができ、誠に有意義な経験となりました。

7月2日には申請した予定通り、ロサンゼルスより帰国し、7月3日に仙台に無事に到着しました。今回、国際学会で得られた情報や知識をできるだけアウトプットし、研究や社会的な貢献活動などにも、つながるように、今後とも精進していきたいと考えております。

最後になりますが、この度、今回の国際学会の発表において、助成をいただきました「日本心理学会」及び「関係者の皆様」には、誠に深く、御礼を申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 9月 10日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院人間総合科学研究科 博士前期課程2年

氏 名

上條 菜美子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The International Congress on Clinical & Counseling Psychology 臨床・カウンセリング心理学国際会議
公式ホームページ URL	http://www.cpsyc.org/
開催期間	2013年 8月 6日 ～ 2013年 8月 9日
旅行期間	2013年 8月 5日 ～ 2013年 8月 11日 (旅行期間が申請書よりも1日長くなっています)
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Turkey, Istanbul, Radisson Blu Conference & Airport Hotel トルコ, イスタンブール, ラディソン・ブル コンファレンス&エアポート ホテル
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	上條 菜美子 (筑波大学大学院人間総合科学研究科) 湯川 進太郎 (筑波大学人間系)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Meaning making and rumination to stressful events : The roles of threat evaluation and personality ストレスフルな出来事に対する意味づけと反すう —脅威評価と個人特性に着目して—
補助金額	100,000円 (内訳 航空費・宿泊費を含むツアー代金の一部にあてさせて いただきました)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動内容】

2013年8月6日から8月9日にかけて、トルコのイスタンブールで開催された、The International Congress on Clinical & Counseling Psychology において、ポスター発表を行った。申請者の発表日時は8月7日の18:00~19:00であり、発表題目は“Meaning making and rumination to stressful events: The roles of threat evaluation and personality (日本語題目：ストレスフルな出来事に対する意味づけと反すう—脅威評価と個人特性に着目して—)”であった。本学会は、臨床家やカウンセラーが集い、臨床現場における実証的研究や調査研究を発表・情報交換を行う国際学会である。参加者人数が50人前後と、比較的小規模な学会であるが、キーノートスピーカーらの講演は、それぞれ幅広い分野を扱っており、内容のみならず、プレゼンテーションの方法も工夫が施してあり、魅力的な講演が多かった。また、オープニングセレモニーではトルコの伝統的なフォークダンスショーが催され、参加者たちが一緒になって踊るなど、ユニークな企画もあった。さらに、コーヒープレイクの休憩時間やランチの時間など、研究に関して議論する場が数多く設けられた。

【成果】

1. 自身の研究発表

申請者の発表内容は、ストレスフルな体験に対する意味づけと、その意味づけに重要とされている反すうを規定する要因について検討したものである。大学生780名を対象に、一般的にストレスフルだと思われる仮想場面を呈示し、その場面について意味づけおよび反すう頻度と、これらに関連すると予想される要因について回答を求めた後、日常の思考スタイルと実行機能を測定する質問項目に回答を求めた。その結果、不適応的な特徴を持つ思考スタイル（反すう特性）が出来事に関する反すうの頻度を高めていた。また、出来事に対する脅威度の評価が高いほど、意味づけは抑制されたが、反すうを介することによって、逆に意味づけが促進される過程が示された。

ポスターセッション時間は1時間であったが、その間に多くの研究者や臨床家が訪れ、ポスターに対する意見や質問をいただくことができた。申請者と研究者同士間だけでなく、発表を見に来た研究者同士も盛んに議論をしており、国内学会とはまた違う雰囲気を楽しむことができ、新鮮かつ刺激的であった。同時に、自身の英語力の未熟さを痛感し、次回の国際学会への士気が高まった。

2. 他の研究発表

本学会期間中に行われた研究発表は、キーノートレクチャー4件、ワークショップ6件、口頭発表24件、ポスター26件であった。発表内容としては、精神的健康に関する基礎的研究から、子どもをはじめとして、様々な対象に対する介入的研究まで様々であった。国外における研究動向を知ることができたことや、様々な国の研究者たちが集う学会に参加できたことはとても有意義で、今後の研究に対する大きな励みとなった。また、研究者たちは口頭発表中の質疑応答や、ポスター発表でも、積極的に質問や議論を行っており、国内の学会よりも活発な意見交換が行われていたように感じた。今回何よりも感じたことは、己の言語力の未熟さであったが、言語だけではなく、研究に対する積極性や、臆することなく自分の意見を言う度胸、相手の研究をしっかりと理解し認めた上で議論をするなど、他者の研究に対する態度や向き合い方について身を持って学ぶことができた。次回参加する際は、今まで以上に言語力を身につけ、研究者たちと有意義な議論をしたいと思う。

【最後に】

この度は、申請者の発表に対し、国際会議等参加旅費補助金をいただきまして、心より感謝申し上げます。今回の国際学会で感じ考えたことを忘れず、今後の研究生生活に活かしてゆく所存です。ありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年 9月 23日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士後期課程
氏名 古村 健太郎



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The International Congress on Clinical & Counselling Psychology (臨床・カウンセリング心理学国際会議)
公式ホームページ URL	http://www.cpsyc.org
開催期間	2013年 8月 6日 ~ 2013年 8月 9日
旅行期間	2013年 8月 5日 ~ 2013年 8月 12日 (航空券確保の関係上、日程が申請よりも2日長くなっている)
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Tukey, Istanbul, Radisson Blu Conferece & Airport Hotel (トルコ, イスタンブール, ラディソンブルカンファレンス&エアポートホテル)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	古村 健太郎 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Association between commitment, positive and negative affects, and depression in romantic relationships (接近・回避コミットメントとポジティブ感情, ネガティブ感情, 抑うつに関連) (分析の変更に伴い, 申請時と発表のタイトルが異なっている)
補助金額	100,000円 (内訳 旅行代金 177,940円の一部として使用)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、申請者の発表に対し、国際会議等参加旅費の助成をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。以下に補助金の使用状況、及び、当学会での活動内容とその成果を報告いたします。

【補助金の使用状況】

補助を受けた 100,000 円は、成田—イスタンブール間の旅費（177,940 円）の一部として使用した。なお、旅行会社のツアーパックを使った関係上、日程が申請よりも 2 日間長くなっている。

【申請者の発表】

トルコ共和国イスタンブールで開催された The International Congress on Clinical & Counselling Psychology にて、“ Association between commitment, positive and negative affects, and depression in romantic relationships.” のポスター発表を行った。本研究は、恋愛関係を継続する理由が抑うつに与える影響を検討したものであり、その媒介変数として恋人への感情や相互作用の仕方に注目した分析を行った。本学会は、臨床心理学やカウンセリングを専門としている人が集まる学会のため、私の研究の成果が実践においてどのような役に立つのかという点の質問を受けた。このような点を強く意識したことはなかったため、十分に答えられなかった点が反省点として挙げられる。

【得られた成果】

Keynote Speech として、Indiana University の Dr. Chung による同性愛をカミングアウトされた家族の反応と受容、及び、当該家族の支援策についてのスピーチ（Coming Out Experience of Lesbian, Gay, and Bisexual Persons: Family Reaction and Acceptance）、University of Groningen の Dr. Schultz による女性の性的欲求や性的覚醒の問題に関する生物学的プロセスとその薬物療法についてのスピーチ（"In the mood for sex: the value of androgens"）に参加した。どちらの発表も、どちらのテーマも日本国内ではあまり見かけないテーマである点、さらに、それを臨床的な実践とどのように結びつけるかについて考察している点で非常に刺激を受ける発表であった。しかし、Dr. Chung の研究は、単相関は報告しているものの考える第 3 変数の影響は考慮していないなど基礎的なデータの積み重ねに問題点があった。また、DR. Schultz の研究は理論的かつ基礎的なデータを積み重ねているが、それが臨床的な実践に応用するまでに至っていないという問題点があった。これらの問題点から、基礎的な研究から社会的な実践や臨床的な実践へと応用のきく研究を意識することの重要性を認識した。また、そのような重要性を意識しながら、日々の研究活動を行っていく必要があると改めて認識することとなった。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 9月 27日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪大学大学院人間科学研究科
博士後期課程

氏 名

井崎 基博



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	16 th European conference on Developmental Psychology 第16回 ヨーロッパ発達心理学会
公式ホームページ URL	www.unil.ch/ecdp2013
開催期間	2013年9月3日 ~ 2013年9月7日
旅行期間	2013年9月1日 ~ 2013年9月9日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Lausanne, Switzzland University of Lausanne ローザンヌ大学、ローザンヌ、スイス
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	井崎基博 ¹ 、金澤忠博 ¹ 、日野林俊彦 ¹ 、北島博之 ² 、藤村正哲 ² 、糸魚川直佑 ³ ¹ 大阪大学大学院人間科学研究科 ² 大阪府立母子保健総合医療センター ³ 武庫川女子大学
発表題目 ※正式名と日本語訳	Attention to social cues in extremely low birth weight children with autism 自閉症のある超低出生体重児の社会的手がかりへの注意
補助金額	100,000円(内訳 航空券代)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動報告】

2013年9月3日～7日にかけてスイス、ローザンヌ大学で開催された 16th European conference on Developmental Psychology に参加し、“Attention to social cues in extremely low birth weight children with autism” という題目でポスター発表を行った。また、自身の発表以外には言語発達、発達障害、早産児の発達などに関するシンポジウムやポスター発表に参加し、最新の知見を得ることができた。

【成果】

1. 自身の発表

報告者の発表日時は、5日の9:00～12:30であり、“psychopathology & intervention” というセッションで発表した。

発表内容は学齢期の超低出生体重(ELBW)児のコミュニケーション場面における社会的手がかり(発話のプロソディや視線)の理解と自閉的特性との関連についての実験による検討であった。実験はアイトラッカーを用いて視線データを測定し、ELBW児の視線の追従や停留を定量化した。さらに、これらの計測値と自閉症特性の関連について検討した。

開催国のスイスで早産児研究が脚光を浴びていること、ヨーロッパではELBWとAD/HDの関連について心理学的に検討した研究は多いがASDとの関連はまだ研究が少ないこと、初日のopening symposiaにおいてアイトラッカーを用いた研究がさらに注目されるようになるだろうという講演があったこと、などの理由から多くの研究者に興味を持ってもらうことのできる発表となった。欧米での早産・ELBW児研究の動向についても教えていただき、本研究の独自性や研究の改善点、今後の展望についても示唆を得ることができた。また、一日でも早く英語論文としてまとめ投稿することの必要性を改めて感じた。

また、今回が初めての海外学会での発表であったが、英語でのコミュニケーション能力が不足していることを再認識させられた。表面的な説明に終始することが多かったので、もう少し深く議論できるよう語学力を身につけたい。

2. その他の研究

発達障害や言語発達(読み書きを含む)、早産・超低出生体重児の発達特性などさまざまなテーマで講演やシンポジウムが行われていたが、自閉症やディスレキシアに関して遺伝と環境の相互作用という点から検討された研究が進められているようである。

また、健康に育っている早産・低出生体重児であっても、学齢期に社会性(友人関係などを含めて)や言語学習などでのつまずきを示すことが多い。この原因について遺伝および周産期の脳損傷のみに求めるのではなく、母子相互作用やアタッチメント、新生児集中治療室(NICU)のケア環境、睡眠の質、貧困などとの関連を説明した研究もみられた。

研究方法としては、脳活動の計測に関して子どもにとって非侵襲的な方法であるNIRS脳計測装置を用いた研究もいくつか紹介されており、今後の研究には必要不可欠な装置の一つであることがうかがわれた。また、読み書き能力や睡眠の質についての新しい計測方法についても学ぶことができた。

これらの研究報告を聞くことを通して、早産・低出生体重児と発達障害の関係について研究するためのいくつかのヒントを得ることができた。

【付記】

この度は、国際学会参加に対して、国際会議等参加旅費補助金をいただきまして、日本心理学会、学会関係者の皆様にご心より感謝申し上げます。今後の研究に対するヒントを得ることができた大変貴重な経験となりました。本当にありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013 年 10 月 30 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名九州大学大学院統合新領域学府 博士課程

氏 名 祈 秋夢



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	16 th European Conference on Developmental Psychology ヨーロッパ発達心理学学会第 16 回大会
公式ホームページ URL	http://www3.unil.ch/wpmu/ecdp2013/
開 催 期 間	2013 年 9 月 3 日 ～ 2013 年 9 月 7 日
旅 行 期 間	2013 年 9 月 2 日 ～ 2013 年 9 月 13 日 (航空券の予約の都合により、期間が申請書より長くなりました)
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Switzerland, Lausanne, University of Lausanne スイス、ローザンヌ、ローザンヌ大学
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	Qi Qiumeng 祈 秋夢 九州大学大学院統合新領域学府 Asakawa Kiyoshi 浅川 潔司 兵庫教育大学学校教育研究科
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The Effect of School Adjustment on Subjective Well-Being of Chinese and Japanese Adolescents 中日青年の学校適応感が主観的幸福感に及ぼす影響
補 助 金 額	10 万円 (内 航空券、宿泊費及び大会参加費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、日本心理学会より「国際会議等参加旅費補助金」をいただきまして、心より感謝申し上げます。以下に、当該会議での発表、ならびにその成果を報告させていただきます。

【概略】

報告者は、2013年9月3日から2013年9月7日までにスイス・ローザンヌ大学で開催されたヨーロッパ発達心理学学会第16回大会に参加及び口頭発表を行った。ヨーロッパ発達心理学学会は、参加者が1000人以上となる大規模な学会であり、発達心理学研究の先端に立っている。この会議に参加することによって、現在世界で注目されている研究テーマについて知ることができ、さらに普段論文や著書で勉強させていただいている第一線で活躍中の先生方に実際に会うことができ、自身の研究について議論するという機会を持たことは大変大きな収穫となった。

【研究発表内容】

報告者の発表は2013年9月5日16:30 - 18:00の“Self-Regulation, Self-Concept, and Well-Being” Thematic Sessionsで「The Effect of School Adjustment on Subjective Well-Being of Chinese and Japanese Adolescents（日中青年の学校適応感が主観的幸福感に及ぼす影響）」というタイトルであった。兵庫教育大学学校教育研究科の浅川潔司教授との連名として口頭発表を行った。その内容は以下である。

主観的幸福感(Subjective well-being)は近年経済学や心理学などあらゆる領域の研究テーマになっている。発達心理学では、中高齢を対象としての研究が多く、青年期あるいはそれ以下を対象とする研究は相対的に少ない。また、学校は青年に対して主な生活環境であるため、学校適応感が青年の主観的幸福感にどう影響するかを検討する必要があると考えた。本研究では、700人の中国と日本の中学生と高校生を対象者とし、「オックスフォード幸福感尺度(Hills & Argyle, 2002)」と「学校適応感尺度(浅川・尾崎・古川, 2003)」を用い、中日青年の学校適応感が主観的幸福感に与える影響を検討した。その結果、学校適応感とオックスフォード・幸福感尺度および下位尺度の正の相関関係が存在することを明らかにした。これは、中国と日本において、学校での適応感が高い青年に、自分の生活に対する状況評価の良さが関係することを示唆している。従って、青年の主観的幸福感における比較研究をする際に、環境文脈との関わりを考慮し、その指標となる青年の学校適応感を変数に加えて主観的幸福感に与える影響を測定した本研究のアプローチは有効であったといえる。

以上のように本発表では、従来欧米中心に行われてきた研究テーマにおいて、アジアにおける研究成果を示したことによって、文化的、学際的な交流、議論ができた。フィンランドの学校教育を専門とする研究者との意見交換をする中で、日本で開発された学校適応感尺度が自己肯定感、学習への意欲、友人関係などの因子を含むという点でフィンランドにおいて採用された尺度と同じ特徴を持っていることが分かった。このことは今後互いの研究成果を参考にでき、共同研究をする可能性が見出された。また、日本からの参加者も多く見られ、親しい言語環境で主観的幸福感は量的に捉える一方で、質的方法を用いることで人々の幸福感のその意味合い自体を探ることができるというこれからの方法論についても議論し、自らの研究テーマの意義を再確認する意味でも大きな収穫であった。

【他の関連する学際活動】

この国際会議では、自身の報告以外に、Pre-Congress Workshop、ERU Lecture on Presentation Skills、また質的研究を専門とするやまだようこ教授のKeynoteにも参加することによって、英語で学術的な交流ができたことは今後の研究に有意義に生かしていきたいと考えている。

この国際会議では海外の研究者との交流、最新の研究発表が聴けたことはもちろん大きな成果だったが、国内の学会ではほとんど会うことがない日本人研究者と再会し、互いの研究の進捗状況を報告することができたことが有意義であった。また、心理学が発祥したヨーロッパを初めて訪れ、その空気を肌で感じることは、研究者人生において非常に感慨深いことであった。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 9月 10日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院教育学研究科
博士課程

氏 名 佐藤賢輔



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	16 th European Conference on Developmental Psychology 第16回ヨーロッパ発達心理学会
公式ホームページ URL	http://www3.unil.ch/wpmu/ecdp2013/
開催期間	2013年9月3日 ~ 2013年9月7日
旅行期間	2013年9月3日 ~ 2013年9月8日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	University of Lausanne, Lausanne, Switzerland (スイス・ローザンヌ・ローザンヌ大学)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	佐藤賢輔 東京大学大学院教育学研究科 実藤和佳子 九州大学高等研究院
発表題目 ※正式名と日本語訳	Irrational outcomes promote young children's understanding of false beliefs 非合理的事象は幼児の誤信念理解を促進する
補助金額	100,000円 (内訳 東京・ジュネーブ間の航空運賃 148,830円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動報告】

報告者は2013年9月3日から7日までスイスのローザンヌ大学にて開催された16th European Conference on Developmental Psychologyに参加し、“Irrational outcomes promote young children’s understanding of false beliefs”（非合理的事象は幼児の誤信念理解を促進する）という題目でポスター発表を行った。

【成果】

1. ポスター発表

報告者は9月4日の午後に発表を行った。発表セッションは“Cognitive Science”であった。午後のポスターセッションは掲示時間帯が13:30～18:00で、15:00～15:15と16:00～16:30のコーヒープレイクが発表者の責任在籍時間と指定されていた。報告者は責任在籍時間を含め2時間以上ポスター前に在籍し、発表、議論を行った。ポスター会場への全体的な人の入り、報告者の発表への訪問者は期待していたほど多くはなかった。これは在籍時間が短く細切れになっていたために、前後のセッションに参加する参加者にとって、ポスターを吟味する時間があまりなかったことが原因と思われる。そのためか、訪問者には報告者と関心領域が極めて近い研究者が多かった。このことが結果的にじっくりと落ち着いた議論につながり、報告者の実験に対するクリティカルなコメントや、現在進めている研究課題に直結するような示唆が得られた他、ヨーロッパにおける当該領域の研究動向なども知ることができ、全体としては意義深い発表になった。一部の訪問者とは今後も密に情報交換をしていくことを確認するなど、新たな人脈の形成にもつながった。一方で、報告者の英語力不足によって議論がスムーズに進められないと感じる場面が多々あった。この反省から、英語によるコミュニケーション力、執筆力を高めていくことによって、研究者としての存在感を示していきたいとの思いをより一層強く持った。

2. 発表以外の大会への参加

今大会では、報告者の関心領域である社会的認知の発達、特に心的状態の推測に関連する心のはたらき（マインドリーディング、心の理論）に関する発表が特に多く、大会への参加を通じて、自身の研究と今後の方向性についてより思考を深めることができた。特に、社会的認知の発達研究のパイオニアの1人であるCentral European UniversityのGyörgy Gergely博士による基調講演は、最新の研究成果を含む博士のこれまで研究結果をまとめあげ、人の認知の特徴とその発達を文化や進化といった大きなストーリーに位置づけていくことの重要性、文化の世代間伝達の基盤を明らかにする上で、行動を指標とした発達心理学研究が持つインパクト論じたもので、自身の研究の意義や可能性について再考のきっかけとなる印象深い講演だった。また、今大会には日本からの参加者も多く、空き時間にはそれぞれの研究発表や今大会で印象に残ったプレゼンテーションなどについて語りあうことも多く、国際的に活躍しておられる本邦の先輩方から様々なことを教わることができたのも収穫であった。

【付記】

この度は、国際会議等参加旅費補助金の支給対象として採択していただき、日本心理学会ならびに関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。今回の会議参加を通じて学んだこと、感じたことを今後の報告者自身の研究に必ず生かし、より一層研究に邁進していきたいと思っております。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 8月 16日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程

氏 名 豊島 彩



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 23 th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics 第 23 回国際老年学会
公式ホームページ URL	http://www.iagg2013.org/Eng/index.php
開 催 期 間	2013年 6月 23日 ～ 2013年 6月 27日
旅 行 期 間	2013年 6月 23日 ～ 2013年 6月 27日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	대한민국・서울・코엑스 韓国・ソウル・Coex
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	豊島 彩 ¹ ・佐藤眞一 ¹ ¹ 大阪大学大学院人間科学研究科
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	Relationship between providing social support and loneliness among the middle aged and the elderly. 中高年者におけるソーシャルサポートの提供と孤独感の関連
補 助 金 額	50000 円 (内訳 航空費と宿泊費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動内容】

2013年6月23日から27日に開催された The 23th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics(第23回国際老年学会)に参加し、ポスター発表を行った。

報告者は3日目25日の13:30からのポスターセッションで発表をした。報告者の在籍責任時間は13:45~14:00であったが、15分という大変短いセッションであったので、13:00からポスターの前に立ち、立ち止まった人に声をかけ研究内容の説明をし、質問に来た研究者と議論を行った。

発表以外では、報告者の研究テーマに関連するシンポジウムに参加した。具体的には、報告者の研究テーマである“高齢期の孤独感”についてのシンポジウムや、日本と韓国の老年学会が共同開催する日韓共同フォーラム等に参加した。

【成果】

1. ポスター発表

本大会では、ポスターセッションの時間が短いため、より自分の研究内容に興味を持ってくれる研究者にアピールするため、前日からポスターの掲示場所にハンドアウトや名刺を設置した。発表当日には、前日に置いていたハンドアウトを見て質問に来た研究者が2,3名おり、短い発表時間の中でより深い議論をすることができた。具体的には、中国の研究者から「ソーシャルサポートを提供する」という概念が分からないという質問を受け説明をしたところ、中国には家族以外に物質的援助をするという考えがあまりないと言われ、同じアジア圏でも文化差のあるテーマであることを改めて知ることができた。

2. シンポジウム等の参加

“高齢期の孤独感”についてのシンポジウムでは、量的研究、質的研究、文献研究といった異なるアプローチによる視点から議論が行われた。特に質的研究について、報告者は今後質的研究法による調査を予定しているため、議論に参加できたことは非常に有意義であった。また、質的研究についての発表をした、イギリスのブルネル大学の Christina Victor 教授の研究報告が最終日の朝にあることを知り、急遽予定を変更して参加した。最終日の発表は、予備調査として行ったインタビュー調査についてであり、孤独感についての質的データが豊富に提示され、大変興味深い内容であった。報告者が今後予定しているインタビュー調査の参考にするため、インタビュー方法の詳細について尋ねたところ、連絡先を交換することとなり、学会後メールでインタビュー調査のアドバイスを受けた。その他にも、以前連絡をとったことのある、アイオワ州立大学の Peter Martin 教授に直接会うことができ、研究内容について得られた結果の解釈や今後の展望について尋ねられ、議論することができた。

3. 全体としての成果

本大会は報告者にとっては2回目の国際学会であり、前回と比べ自分の研究内容について海外の研究者と意見を交換したり、自分から研究者に声をかけたりとより有意義な5日間を過ごすことができた。その結果、海外でも孤独感を量的に比較するだけでなく、質的側面にも注目されていること、アジア圏内での文化比較をする必要性があることについて学ぶことができた。以上が本大会に参加して得られた主な成果である。

【付記】

この度は、国際学会等参加旅費補助金をいただきまして、心より感謝申し上げます。以上をもって活動内容、ならびにその成果の報告とさせていただきます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 8月 28日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院・博士課程在籍

氏 名 正田 真利恵 

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The annual meeting of Cognitive Science Society 2013 Society for Complex Systems in Cognitive Science 3rd meeting (認知科学会年次大会 2013, 認知科学に関する複雑系システムに関する会議)
公式ホームページ URL	http://cognitivesciencesociety.org/conference2013/index.html http://perceptualdynamics.be/index.php?option=com_content&view=article&id=60&Itemid=210
開催期間	2013年 7月 30日 ~ 2013年 8月 4日
旅行期間	2013年 7月 29日 ~ 2013年 8月 5日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Bundesrepublik Deutschland・Berlin・Humboldt Universität zu Berlin ドイツ連邦共和国・ベルリン・フンボルト大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	正田真利恵・横澤一彦 (東京大学)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Foot movement for walking biases the visual attention allocation (歩行時の足部運動が、注意分布に与える影響)
補助金額	¥100,000 円 (内訳：航空券代の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

申請者らの研究発表に対して、援助頂き、誠にありがとうございます。審査に携わった先生方、および、学会会員のみなさまに、深く御礼申し上げます。以下では、認知科学会とその分科会（以下、CogSciと略す）、そして、申請者らの研究発表の概要に関して、ご報告申し上げます。

【CogSci に関して】

CogSci は、認知科学に関する国際学会で、工学（センサ、ロボット、情報）、理学（主に数学）、医学・生理学、心理学（認知、教育を含む発達）、言語学、哲学という、様々な背景をもった研究者が、一同に会し、人間の認知に関して、広く議論を行なう場である。心理学会と異なる特徴として、企業や国の研究機関で働いている研究者、もしくは、経験者が多いこと、また、共通言語が数学であるということが挙げられる。自身の主専門分野に閉じこもらず、隣接領域の人にも、自分の研究や興味関心をぶつける必要があるという考えの人が多いため、年齢によらずアグレッシブで、度量が広い人ばかりである。

心理学を専門としている人の背景を見ると、教育や発達心理学の割合が高いように思われる。臨床心理学は、皆無である。原因として、ロボティックやセンサ系の専門家が、会員の大半を占めていることが考えられる。上記の状況を反映した上で、本学会で受け入れられやすい、認知心理学のテーマは、思考、言語、多感覚知覚/認知、運動-知覚の協応のようである。

本会議の特徴として、チュートリアルが数多く用意されているので、興味があれば、気軽にお隣の専門分野の知識の一端に触れられる点が挙げられる。またポスターセッションでは、軽食が用意されており、学会自身が、専門分野によらない研究者間の交流を強力に後押ししている。好奇心が強い人や、学際的な研究に取り組んでみたいと考えている人にとっては、有意義な会になると思う。

【申請者自身の発表】

申請者らは、歩行時の視空間的注意の分布が静止時とは異なること、加えて、その変化を生じさせる原因について、ポスター発表を行なった。発達心理学、生理学、そしてロボティクスを専門とする方々が、多く聞きに来てくださった。生理学、特に運動生理を専門とする方からは、筋・骨格系のデータは取らないのかというご意見を頂いた。大部分の方には、申請者らが“歩行”自体よりも、そのときに生じる“認知処理”に興味があるという点は、理解していただいた。その上で、申請者らの研究目的を考慮に入れた場合には、必要とされる統制は行なわれていることを納得していただいたと感じた。また、発達心理学を専門とされる方とは、成人と乳幼児の運動-認知システムの連続性に関して、議論させていただいた。ロボティクスの方からは、ロボットを歩行させるときの限界や、それを突破していくために考えられている方法について、お話を伺うことができた。最後に、運動生理、特に歩行に関わる研究界では著名な方から、先方の研究室で勉強・研究しないかと声をかけていただいた。これは、申請者の興味が評価されたということであり、大変嬉しく感じた。

【さいごに】

昨年度の CogSci では、学生ボランティアとして、学会運営に携わっていた。今回は非ボランティアとして参加したが、裏方の苦労があって、学会が正常に執り行われることを違う立場から、実感することができた。また、当時のボランティアメンバーと再会し、各国の大学院生事情や就職事情、個々人の夢について、語りあえたことは良い経験になった。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年9月27日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 早稲田大学大学院人間科学研究科
博士課程3年
氏名 中村 愛



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Driver Behaviour and Training Conference 2013 運転者の行動と訓練に関する国際会議 2013
公式ホームページ URL	http://www.icdbt.com
開催期間	2013年8月19日 ～ 2013年8月20日
旅行期間	2013年8月17日 ～ 2013年8月22日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Finland・Helsinki・University of Helsinki (フィンランド・ヘルシンキ・ヘルシンキ大学)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	中村 愛 (早稲田大学大学院人間科学研究科) 島崎 敢 (早稲田大学人間科学学術院) 石田 敏郎 (早稲田大学人間科学学術院)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Self-Evaluation Bias of Stopping Behavior at a Crossing with a Stop Sign and Improvement of Full Stop Rate (交差点における一時停止行動の自己評価バイアスと停止率の改善)
補助金額	100,000円 (内訳 往復航空運賃と宿泊代金 262,540円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合 (旅行期間や発表題目の変更など) は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【学会の様子】

2013年8月19日と20日にフィンランドのヘルシンキ大学で“Driver Behaviour and Training Conference 2013”が開催されました。本学会は自動車の事故防止を目的としてドライバーの運転行動の問題やトレーニング方法の検討をテーマとする学会です。小規模な学会であったためアットホームにディスカッションを行うことができました。日本からの参加者は共同研究者である早稲田大学の島崎敢先生と私の2名のみで、交通心理学の研究が盛んなイギリスとオーストラリアからの参加者や、フィンランドの隣国であるロシアからの参加者が目立ちました。本学会に参加して驚いたのは研究者だけではなく民間企業の参加者が多かった点です。例えば、数千台の営業車を抱えるロシアのメーカーの安全担当者によれば、営業中に起こる事故による人的被害や経済的損失等が大きく事故削減が大きな課題となっているため、本学会のようなドライバー教育に関する発表が多い学会に参加し情報収集をしているようです。彼らとの会話によって、研究に関するディスカッションを行うだけではなく、現場が抱える問題等を具体的に知ることができたことも非常に貴重な経験となりました。発表は、基調講演4件、オーラル発表56件、ポスター発表11件が行われました。全体的に基礎的な研究よりは開発ツールの効果検証や教育システムの提案など実用的な研究が多い印象を持ちました。学会初日の夜はディナークルーズが用意され、素敵な景色を背景に各国の参加者と交流を深めることができました。



路面電車が発達するヘルシンキの街並み

【私の発表内容】

私は“Self-Evaluation Bias of Stopping Behavior at a Crossing with a Stop Sign and Improvement of Full Stop Rate”というタイトルでポスター発表を行いました。これはドライバーの一時停止行動に対する自己評価バイアスを検討するとともに、一時停止行動を改善させる取り組みを行った研究です。実験参加者であるタクシードライバー15名が一時停止交差点を左折する様子を交差点前方からビデオカメラで撮影し、ドライバーが誰かわからないようにドライバーの顔と車両ナンバーにぼかし処理を施した映像を本人に見せて、一時停止行動を“危険・安全を示す”ビジュアルアナログスケールで評価してもらいました。いずれの実験参加者も自分の運転映像であると気付いた様子はなく自分で自分の一時停止行動を強く批判していました。実験後に実験参加者に運転映像が自分のものであったことを開示し、開示前後で一時停止行動に変化があるか検討したところ、開示前は約10%であった一時停止率が、開示後は25%まで改善しました。本研究の結果から、実験参加者が一時停止しないのは、一時停止するつもりがないからではなく、自分では一時停止しているつもりだが実際にはできておらず、そのことに気付いていないことが原因であると推測されます。したがって、従来のような安全態度の指導をするだけでは効果が得にくいと考えられます。この点について他の研究者とディスカッションが盛り上がり“今後ドライバー教育に取り入れるべき問題である”というコメントを多く頂きました。



質疑応答の様子

この研究をまとめた論文は下記に掲載されています。

Nakamura, A., Shimazaki, K. & Ishida, T. 2013, Self-evaluation Bias in Stopping Behavior whilst Driving, L. Dorn and M. Sullman (Eds.), Driver Behaviour and Training, 6, 117-125.

【付記】

この度は国際学会の参加費用を助成して頂き、日本心理士会会員と学会関係者の皆様に心より御礼申し上げます。この経験を生かし今後も研究活動に励みたいと思います。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 8月 22日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東北大学大学院文学研究科

氏 名 ウィワッタナーパンツウオン, ジュターチップ



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The biannual meeting of International Society for Research on Emotion (ISRE2013) 国際感情学会 2013 年度大会
公式ホームページ URL	http://www.isre2013.org/web/
開催期間	2013 年 8 月 2 日 ~ 2013 年 8 月 6 日
旅行期間	2013 年 8 月 1 日 ~ 2013 年 8 月 7 日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	アメリカ合衆国・サンフランシスコ・カリフォルニア大学バークレー校
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	ウィワッタナーパンツウオン, ジュターチップ (東北大学大学院文学研究科) 本多明生(東北福祉大学) 阿部恒之(東北大学大学院文学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Moral dilemmas in Japan after the Fukushima nuclear disaster: Effects of residential area and disaster experience 福島原子力事故による日本における道徳的ジレンマ—居住地域と被災体験の 効果 (和訳修正)
補助金額	10 万円 (内訳: 空港券代 181,180 円の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、申請者の発表に対して国際会議等参加旅費補助金を頂きまして、心より感謝申し上げます。以下、当学会での活動内容、ならびに得られた成果を報告させていただきます。

【活動内容】

2013年8月2日から6日にかけて、アメリカ合衆国・サンフランシスコ・カリフォルニア大学バークレー校で開催された **The biannual meeting of International Society for Research on Emotion** (国際感情学会 2013 年度大会 ; ISRE2013) に参加・発表した。本学会 (ISRE) は感情にかかわる国際学会であり、アメリカ・ヨーロッパ・日本などにおいて2年ごとに開催される。申請者は8月3日(土)の16:30~18:30時の間ポスター発表を行った。発表題目は“**Moral dilemmas in Japan after the Fukushima nuclear disaster: Effects of residential area and disaster experience**” (日本語題目: 福島原子力事故による日本における道徳的ジレンマ-居住地と被災体験の効果) であった。他の参加者の発表も積極的に聴講・議論し、交流を深めることができた。

【研究発表の成果】

申請者の発表内容は2011年の震災後の復興活動に対する感情について検討したものである。日本全国の1,100人を対象としてインターネット調査を実施した。主な質問項目の内容は住居地域、震災の体験、および復興に関わる6つの対象人物に対する感情評価であった。その結果、激甚被災地の人々が復興に寄せる期待は他の地域より強く、過去の震災・戦災被害が少ない地域の人々は、復興に非協力的な人物への抵抗感が低かった。

発表時間は2時間と長かったこともあり、沢山の人が訪れ、じっくり話すことが出来た。震災をテーマとした発表は、今回、申請者たった一人であったが、震災と感情のテーマへの関心は、世界的に高いことがうかがえた。東北人の代表として復興の実体を説明する機会が得られた。特に、ヨーロッパの人は原子力に対する不安が高いようである。ヨーロッパも同じような問題を抱えていることが気付いた。今後の研究にとって有意義な体験をすることができた。

【他の成果】

当学会期間中に行われた研究発表は、口頭発表が約160件、ポスターが約110件、招待講演が8件と多く、現代の感情研究の方向性をうかがい知ることができた。特に、感情と動物、文化差、顔の検出、表情表出に関心が寄せられているようである。発表の場のほか、休憩時間などにも研究テーマの類似している研究者の方々とお話し、貴重な意見を得た。場の雰囲気も新鮮で、刺激的であった。さらに、今回の発表機会を利用し、2016年日本に開催される国際心理学会 (ICP2016) を紹介することができた。来日意向は強いが、費用面で躊躇している研究者がいたことが印象に残った。

留学生の申請者にとって今回の経験はかけがえのないものであり、今後の研究に活かしてゆく所存です。改めてこの旅費補助金支給に御礼申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 8月 28日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院教育学研究科
臨床心理学コース博士課程大学院生
氏 名 榎原 潤



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 10th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology 第10回アジア社会心理学会大会
公式ホームページ URL	http://aasp2013.psikologi.ugm.ac.id/
開催期間	2013年8月21日 ～ 2013年8月24日
旅行期間	2013年8月20日 ～ 2013年8月24日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Faculty of Psychology, Universitas Gadjah Mada, Yogyakarta, Indonesia. インドネシア, ジョグジャカルタ, ガジャ・マダ大学心理学部
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	榎原 潤 (東京大学大学院教育学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Examination of Two Implicit Stigmatizing Attitudes toward Depression: Blameworthiness and Dangerousness うつ病に対する2種類の潜在的スティグマの検討—「当事者の責任」と「危険性」
補助金額	50000円 (内訳 宿泊費・航空券代)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

私は、報告書の表記の通り、8月21日から24日にかけて開催された第10回アジア社会心理学会大会に参加し、23日に150分のポスター発表を行いました（ポスター発表を実施したことの証明書のコピーを添付いたします）。

今回の大会は、初日である21日に大会本部から発表されたように、開催国のインドネシアをはじめとするアジア諸国に限らず、オーストラリアやイギリスなども含む35カ国以上から参加者が集まる国際性・多様性の豊かな大会でした。初日に行われた懇親会の時点から、各国の参加者間で積極的な会話がなされており、充実した心理学の知見をアジアから発信しようとする熱気に包まれていました。

2日目である22日には、Victoria University of WellingtonのJames Lin氏を始めとして、社会心理学分野で世界をリードする研究者8名による基調講演が行われました。中でも、City University of HongkongのNg Sik-Hungの基調講演は胸を打つところが多いものでした。欧米の心理学で打ち立てられた理論では説明しきれないローカルな視点から知見を見出していくことの重要性について、自身の人生体験も引き合いにしたNg氏の講演から深く考えることができました。

3日目である23日には、一般研究発表のシンポジウムに参加した他、私自身の研究についてポスター発表を行いました。ポスター発表に対する参加者の態度はとても熱心なもので、発表時間中に人が途絶えることがないほどに、私の研究に対する多くの質問や議論を投げかけてくれました。そうした議論を通して、データの統計的処理や研究方法に関する新たな示唆が得られたのみならず、私の研究結果の中で日本に特有の結果と考えられる点や、他の諸国の状況から照らして印象に残る点などについて示唆が得られました。実施した研究の結果にどれほど日本独自の要因が反映されていたかという、自身の研究に含まれていた新たな価値が明らかとなり、日本国内で議論を行うだけでは見えてこない気づきが数多く得られました。

4日目である24日には、一般研究発表のシンポジウムに参加し、ポスターセッションへの参加を行いました。シンポジウムにおいては、発表の途中でも質問や議論が次々と展開され、それぞれのテーマについての議論を全員で深めていくという熱心な雰囲気がありました。ポスターセッションで提示された研究は、用いた研究手法の巧拙の差こそ見られましたが、明確な問題意識を持って実施された研究が非常に多かったことが印象的でした。インドネシア国内でセックス・ワーカーに就く若者が止まらない現状を考えるための研究など、それぞれの国においてなにが問題となっているかを的確に捉えた研究が展開されていた点は、ときに理論の精緻化・細分化ばかりにとどまっていまいがちな日本の心理学研究も大いに見習うべきだと考えました。

以上に記述した国際会議の参加経験を通して、単に自身の研究を英語で公表するだけでなく、自身の身の回りにある問題を深く突き詰めていくという、研究者としてもっとも大事な姿勢について認識することができました。今後、日本というひとつの独自の地域に根ざした知見を世界と共有していくために、本大会の参加者を見習って積極的に議論を他の研究者と行うことと、議論の前提として社会に存在する問題への明確な視点を持つことを心がけて参りたいと思います。

そして今回の国際会議への参加にあたり、多大なご支援をくださった日本心理学会およびご担当の先生方に深く感謝いたします。誠にありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014 年 4 月 7 日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪大学大学院・博士後期課程

氏 名 武藤 麻美



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会 議 名 称 ※正式名称および 日本語訳	The 15th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology パーソナリティと社会心理学会 第15回年次大会
公式ホームページ URL	http://www.spsp.org/?page=Convention
開 催 期 間	2014 年 2 月 13 日 ～ 2014 年 2 月 15 日
旅 行 期 間	2014 年 2 月 12 日 ～ 2014 年 2 月 17 日
開 催 場 所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	U.S.A, Texas, Austin, Austin Convention Center. アメリカ合衆国, テキサス州, オースティン市, オースティン・コンベンションセンター
発 表 者 氏 名 ※全員の名前と所属 日本語表記	武藤 麻美・釘原 直樹 (大阪大学大学院 人間科学研究科)
発 表 題 目 ※正式名と日本語訳	The effects of anxiety on subtyping 不安がサブタイプ化に及ぼす影響
補 助 金 額	100,000 円 (内訳: 航空券代の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

このたびは申請者らの研究発表に対して、援助を頂きまして、誠にありがとうございました。審査員の先生方、学会員の皆様には、深くお礼申し上げます。以下に、参加した、The Society for Personality and Social Psychology (以下、SPSP と略す) の概要と、申請者らが行った研究発表の概要について、ご報告申し上げます。

【SPSP に関して】

SPSP は、年に一回アメリカ合衆国で開催される、社会心理学界における世界屈指の大規模学会である。参加者数も膨大であり、アメリカ合衆国はもとより、カナダやヨーロッパ諸国、アジア諸国など、世界中から参加者が集まり、一堂に会する。参加者の所属は、大学機関に在籍する研究者が多いように思われる。各参加者の発表テーマは、社会心理学分野の主要トピックを網羅している。例えば、「集団間関係や集団内過程」「社会的認知」「感情」「説得と態度変容」「社会的影響」「自己」「対人コミュニケーション」「対人魅力」「パーソナリティ」「精神的健康」「宗教やジェンダー、文化などの社会学的問題」などが挙げられる。見学した発表では、高名な研究者でも、若手研究者の質問にフランクに応じ、議論を交わして下さり、嬉しい経験となった。

学会は、プレ・カンファレンスを皮切りに、シンポジウム、ワークショップ、ポスター発表などが、広大な会議場をほぼ貸し切って、実施されていた。軽食も用意され、研究者同士で議論するためのコミュニティー・スペースも多く設けられており、非常に快適な環境の会場であった。

【申請者の研究発表】

申請者は、ポスター発表を行った。本発表では、精神障害者に対する心理的排除のメカニズム解明にあたり、集団成員への心理的排除の一つの指標と考えられるサブタイプ化 (subtyping) (Parks-Stamm, 2013) に着目し、当該概念に関する先行知見を応用して、これまで未検討であった「精神障害者に対するサブタイプ化が、どのようなプロセスを経て生起するか」を検討した結果を報告した。また、年齢がサブタイプ化に影響するか、15歳から85歳の415名 ($M=29.7$ 歳, $SD=17.1$) の研究対象者を世代別に比較・分析した結果も、併せて報告した。

本研究ではシナリオ実験を実施し、参加者には精神障害者に関する刺激文を読ませ、刺激人物に対する理解度・不安度・サブタイプ化の程度を問うた。その結果、不安の高さが、理解の困難さとサブタイプ化との媒介要因となっていることが確認された。また、世代別でも検討したところ (若年世代: 15歳~25歳 288名; 成人世代: 26歳~55歳 71名; 高齢世代: 56歳~85歳 56名)、若年世代ほど、刺激人物に対し、不安を媒介要因としてサブタイプ化を行うことが示された。つまり、若年者 (特に学生) は、理解できない他者に対する心理的な寛容度が低く、排除しやすいが、社会経験の豊かな高齢者は、心理的な寛容度が大きいことが示唆された。

発表では、例えば潜在指標などを用いて、別のサブタイプ化の測定方法を試してみてもどうかといったご意見や、刺激人物との心理的距離や関係性も考慮に入れた実験デザインを組むこと、参加者の属性 (精神障害に関する既有知識や接触経験の量) や性格特性を統制変数として、今後含めて検討することも課題だろうというご指摘を頂いた。今後修正する点は多くあるが、本研究のアイデアは非常におもしろいというコメントも頂くことができ、大変嬉しく思った。

【さいごに】

本発表は、今後の研究計画を練るうえで、非常に参考になる意見を得る機会となりました。参加できて良かったと思います。改めて、審査者の先生方と会員の皆様には、心よりお礼申し上げます。

G249**INTEGRATING THE STEREOTYPE CONTENT MODEL (WARMTH AND COMPETENCE) AND THE OSGOOD SEMANTIC DIFFERENTIAL (EVALUATION, POTENCY, AND ACTIVITY)**Nicolas Kervyn¹, Susan T. Fiske², Vincent Yzerbyt¹¹University of Louvain, ²Princeton University

We integrate two prominent models of social perception dimensionality. In three studies we demonstrate how the well-established Semantic Differential dimensions, evaluation and potency, relate to the Stereotype Content Model dimensions, warmth and competence. Specifically, we found that Semantic Differential dimensions run diagonally across Stereotype Content Model quadrants.

G250**RED, ROMANCE, AND RIVALRY: WOMEN GUARD THEIR MATES FROM OTHER WOMEN IN RED**Adam Pazda¹, Pavol Prokop², Andrew Elliot¹¹University of Rochester, ²Tnava University

We tested the hypothesis that female participants interpret red clothing on another woman as a sexual receptivity cue, motivating them to distance the woman from the participant's romantic partner. 2 experiments provide evidence that the color red affects women's perceptions of other women along with behavioral intentions of mate guarding.

G251**THE TRUTH ABOUT LYING AND WITNESS CREDIBILITY**Bethany Lasseter¹, Elizabeth R. Tenney², Sara D. Hodges¹, Barbara A. Spellman³¹University of Oregon, ²University of California, Berkeley, ³University of Virginia

Two studies show that witnesses who lie for self-serving reasons about personal information are viewed as providing more credible courtroom testimony than witnesses who provide incorrect personal information because they are mixed up. However, liars were only viewed as more credible when providing eyewitness testimony, not when providing character assessments.

G252**THE EFFECTS OF ANXIETY ON SUBTYPING**Mami Muto¹, Naoki Kugihara¹¹OSAKA UNIVERSITY

The effects of anxiety arised from inscrutable targets on subtyping them were investigated. Subtyping is the one strategy of exclusion. Further the effects of age on the subtyping were tested. Anxiety mediated factors of the inscrutableness and subtyping. Young participants tended to subtype inscrutable targets, but old participants didn't.

G253**MATCHING ROLE MODELS WITH IMPLICIT ABILITY THEORY**Rusty B. McIntyre¹, Keith Welker², Eric Fuller²¹Eastern Michigan University, ²Wayne State University

The study crossed role model success trajectories with fixed/malleable reasons for role model abilities to examine how implicit theories of abilities would affect role model perception and identification. Three-way interactions occurred such that role models who incrementally succeeded with an upward trajectory were liked more by incremental theorists.

G254**ATTRACTIVENESS JUDGMENTS BASED ON PHOTOGRAPHS PREDICT ATTRACTIVENESS JUDGMENTS FOLLOWING LIVE INTERACTIONS**Gul Gunaydin¹, Vivian Zayas², Emre Selcuk³¹Bilkent University, ²Cornell University, ³Middle East Technical University

Research on attractiveness has typically asked participants to rate the attractiveness of individuals based solely on their photographs. But,

do such judgments predict perceptions of attractiveness following actual interactions? We provide the first evidence that attractiveness judgments based on photographs predict (over one month later) attractiveness judgments following live interactions.

G255**UNPACKING MONEY PRIMING: THE ROLE OF SOCIAL PERCEPTION**Jennifer Weng¹, Yi-Cheng Lin¹, Chin-Lan Huang², Jen-Ho Chang¹¹National Taiwan University, ²National Taiwan University of Science and Technology

In the current study, money-priming led to perception of other as less competent, but showed no effect on warm dimension. Implications of the dissociation of money priming effect on competent dimension but not warm dimension are discussed based on social perception theory.

G256**EFFECTS OF TEMPORAL DISTANCE ON SPONTANEOUS GOAL AND TRAIT INFERENCES**Yuri Taniguchi¹, Tomoko Ikegami¹¹Osaka City University

We explored how psychological temporal distance influences spontaneous inferences in person perception. Our experimental results indicated that participants were more likely to form spontaneous goal inferences about proximal actors, but spontaneous trait inferences about distant actors. These findings suggest that psychological temporal distance determines the content of spontaneous inferences.

G257**I KNOW YOU DIDN'T HAVE TO: GRATITUDE DEPENDS ON FREE WILL BELIEFS**Michael J. MacKenzie¹, Kathleen D. Vohs², Roy F. Baumeister¹¹Florida State University, ²University of Minnesota

Four studies found that a weaker belief in free will leads to feeling less grateful, including trait gratitude and gratitude for autobiographical, vignette, and experimental confederate favors. Gratitude depends on perceiving that the benefactor acted freely and might have chosen not to help.

G258**EFFECTS OF MASCULINITY THREAT ON VISUAL OBJECTIFICATION AND SEXUAL AGGRESSION**Friederike Eyssel¹, Fabio Fasoli², Lena Wever³¹Center of Excellence in Cognitive Interaction Technology (CITEC), University of Bielefeld, ²University of Padova, ³University of Bielefeld

Male participants were (or were not) put under masculinity threat, viewed pictures of sexualized and nonsexualized women in the eyetracker, and then reported sexually aggressive behavioral intentions. Under threat, men's viewing patterns indicated "visual objectification" and they reported higher likelihood to sexually aggress than men in the control group.

G259**PERCEIVING A MIND AT THE SLOT: ANTHROPOMORPHIZATION OF SLOT MACHINES INCREASES GAMBLING BEHAVIOR**Paolo Riva¹, Simona Sacchi¹, Marco Brambilla¹¹University of Milano-Bicocca

Three studies tested whether anthropomorphizing slot machines increases gambling. We found that gamblers attributed more human traits to slot machines than did non-regular players. Furthermore, participants spun the reels more times when exposed to an anthropomorphized game, and this effect was due to the emotional experience induced by anthropomorphized devices.

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014年 4月 6日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪市立大学大学院・大学院生

氏 名 矢田 尚也



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	15th Annual Meeting of The Society for Personality and Social Psychology (SPSP 第15回大会)
公式ホームページ URL	http://spspmeeting.org/2014/Home.aspx
開催期間	2014年 2月13日 ~ 2014年 2月15日
旅行期間	2014年 2月12日 ~ 2014年 2月17日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	USA, Texas, Austin, the Austin Convention Center (米国・オースティン・オースティン会議場)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	矢田尚也 (大阪市立大学大学院文学研究科) 池上知子 (大阪市立大学大学院文学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Compensatory judgments in person perception and system justification (対人認知における相補性と体制正当化)
補助金額	100,000円 (内訳 往復航空券代の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2014年2月13日～2014年2月15日に米国、テキサス州オースティンのオースティンコンベンションセンターにて開催された第15回 SPSP (Society for Personality and Social Psychology) 年次大会に参加し、“Compensatory judgments in person perception and system justification” という題目で研究報告を行った。発表日時は2月15日の18:15～19:45であった。

【発表概要】

本報告では、ミクロな現象である印象形成とマクロな社会構造の認知の関係に関する研究が報告された。他者や集団の評価の基礎は“有能性”と“温かさ”に類する2次元であると言われている。より近年では、その2次元に基づく評価が、相補的 (i.e., 有能だが温かくない、有能でないが温かい) になるのか、非相補的 (i.e., 有能で温かい、有能でなく温かくない) になるのかについて議論が盛んになってきている。本研究は、相補的ステレオタイプが平等幻想を生成し体制正当化に寄与するとの議論 (Kay et al., 2007) を参照し、基礎的2次元に基づく相補的印象形成の背景に不平等な社会体制を正当化しようとする動機のある可能性について検討することを目的とした。

本研究では以下のような結果が示された。すなわち、大学在学中の学力と将来の経済水準が強く結びつくと考えている人は、有能な大学生を冷たいと評価するほど、または有能でない大学生を温かいと評価するほど現行の日本社会が正当に機能していると評価した。他方、学力と経済水準が結びつかないと考えている人は、非相補的な認知をするほど体制正当性評価が高かった。特定の個人に対する印象評価と社会体制の認知の関連性、印象形成の体制正当化機能を示唆する結果である。

【成果】

申請者のポスター発表に対して、複数の研究者からコメントや質問をいただいた。研究領域の異なる研究者が多かったが、そのために申請者にとっては新鮮な意見交換ができたように感じる。申請者にとっていつも通りの説明でも、それだけでは多くの場合不十分であった。詳細な説明を求められることで、また、異なる観点からコメントを受け取ることで、自分の研究を理論的に精緻化していくヒントが得られた。また、申請者の発表を聞いた方から肯定的な評価をいただけたことは、申請者の研究意欲を大いに刺激した。

また、SPSP大会は非常に規模が大きく、常に複数のシンポジウムが行われている。申請者も学会期間中にいろいろなシンポジウムに参加したが、日々の研究活動においてあまり目を向けることができていなかった周辺領域の研究の最前線に触れられる非常に良い機会であった。これを通して、これまで読んだことのなかった領域の論文を読むようになり、狭くなりがちであった申請者の視野が広がりつつあるように思われる。このように、第15回 SPSP 年次大会への参加は申請者にとって非常に有意義であったといえる。

【おわりに】

第15回 SPSP 年次大会への参加にあたりまして、日本心理学会より助成を賜ったことを厚く御礼申し上げます。上記のように今回の国際会議への参加は申請者にとって極めて有意義でありました。このような機会を与えて下さり、まことにありがとうございました。

G237**WHERE'S THE POWER IN POWER? FRAMES OF RESOURCE CONTROL INFLUENCE POWER'S EFFECT ON BEHAVIOR AND COGNITION**Tonya M. Shoda¹, Jonathan W. Kunstman¹, Victoria Saba¹, Kelsey Williamson¹
¹*Miami University*

With three experiments, the current work tested the distinct effects of punishment and reward-framed power on cognition and behavior. Punishment-framed power was hypothesized to lead to greater social distance than reward-framed power. Compared to equivalent reward-framed power, punishment-framed power increased objectification and social distance and impaired cooperation and empathy.

G238**THE ATTRACTIVENESS OF MALE CONFORMITY**Alec T. Beall¹, Jessica L. Tracy¹
¹*University of British Columbia*

Although conformity is thought to be an adaptive strategy for increasing fitness, men selectively non-conform when seeking to attract women (Griskevicius et al., 2006). Results from two studies suggest that women find male conformity more attractive than nonconformity, suggesting a discrepancy between male behavior and female preferences.

G239**ANTIFAT ATTITUDES AND BODY IMAGE BIASES IN EVALUATING JOB APPLICANTS**Deborah A. Danzic¹
¹*High Point University*

Relationships between antifat attitudes, body consciousness variables, and job applicant ratings were explored to examine possible weight-related biases. Results showed that while antifat attitudes did not predict weight-related bias, control beliefs and fear of becoming fat did, suggesting that self-perceptions might affect evaluations of others.

G240**COMPENSATORY JUDGMENTS IN PERSON PERCEPTION AND SYSTEM JUSTIFICATION**Naoya Yada¹, Tomoko Ikegami¹
¹*Osaka City University*

The present study examines whether compensatory judgments based on competence and warmth in person perception serve system justification. Our results show that non-compensatory judgments help justify the status quo but only among those who do not believe in the predictive power of academic ability for future economic success.

G241**WHEN HOT IS NOT SO HOT: THE INFLUENCE OF PERSONAL VALUES ON THE HALO EFFECT**Andrey Elster¹, Lilach Sagiv¹
¹*The Hebrew University of Jerusalem*

We examined the influence of benevolence values on susceptibility to perceptual bias. The effect of personal "warmth" vs. "coldness" (the Halo Effect) on the impression regarding target's social traits was stronger for individuals who emphasize benevolence values. The moderating effect of benevolence was found only regarding socially-related outcomes of impression.

G242**LOSING THE FUTURE: WHY YOUNGER VICTIMS EVOKE MORE DISTRESS**Thomas P. Dirth¹, Nyla R. Branscombe¹
¹*University of Kansas*

The distress felt concerning the death of a stranger depends largely on the age of the victim; we sought to determine the mediator of this relationship. Evidence supporting the idea that potential contribution lost due to the victim's death explains why younger victims evoke the greatest distress among observers.

G243**INTELLIGENCE JUDGMENTS ARE MISLEADING AT FIRST BUT IMPROVE OVER TIME**Stacy Y. Sim¹, Jill A. Brown², Frank J. Bernieri¹
¹*Oregon State University*, ²*University of Toledo*

Small groups of unacquainted participants (total N = 155) judged each other's intelligence after a getting-acquainted conversation with little accuracy. However, intelligent judgments became significantly accurate after ten weeks. Throughout this time, participants became well-acquainted with each other by working together, travelling together, playing games, and having meals together.

G244**EMPATHIC ACCURACY IN DAILY INTERACTIONS BETWEEN ROMANTIC PARTNERS: THE EFFECT OF QUARRELSOME BEHAVIOR AND ATTACHMENT ORIENTATION**Gentiana Sadikaj¹, D. S. Moskowitz¹, David C. Zuroff¹
¹*McGill University*

We examined whether partner's quarrelsome behavior impacted person's perception of partner's negative affect. Attachment's effects were explored. Partners in 93 couples reported on negative affect, quarrelsome behavior, and perceptions of partner's negative affect during 20 days. Partner's quarrelsome behavior enhanced person's empathic accuracy and attachment moderated this effect.

G245**NICE TO MEET YOU, HOW CAN I HURT YOU? IMPACT OF SADISM ON FIRST IMPRESSIONS**Marina Le¹, Katherine H. Rogers¹, Erin Buckels², Jeremy Biesanz¹
¹*University of British Columbia*, ²*University of Manitoba*

Sadism exists among everyday people. How does sadism affect first impressions of personality? Perceivers higher in sadism viewed others less normatively – reflecting a lower understanding of the average individual's personality. The effect was independent of well-being. Targets higher in sadism were less liked and sadists picked up on this distaste.

G246**DOES A WOMAN'S HAIR COLOR AND LENGTH AFFECT PERCEPTIONS AND ATTENTIONAL FOCUS?**Susanna S. P. Petaisto¹, David C. Matz¹, Hillary B. Manning¹
¹*Augsburg College*

We tested the hypothesis that variants in hair color and length influence how males perceive and attend to females. The results of an eye-tracking study indicate that both hair color and length can influence perceptions and that darker hair tends to draw attention toward facial features.

G247**SELF- VERSUS OTHER DESCRIPTIONS AND JUDGMENTS OF PERSONALITY: A JUDGE BY TOPIC INTERACTION**Stefanie M. Tignor¹, C. Randall Colvin¹
¹*Northeastern University*

A two-phase study examined the effect of description topic on judges' perceptions of personality. Targets were perceived as more agentic when describing the self, and more communal when describing a friend. Although judge-target agreement was higher for self-descriptions, a judge by topic interaction was found to be significant.

G248**UNREALISTIC OPTIMISM AND VIOLENT CRIME: HOW BELIEFS AND ATTITUDES INFLUENCE THE OPTIMISM BIAS**Emily Stark¹, Daniel Sachau¹
¹*Minnesota State University, Mankato*

In the current study, we examine unrealistic optimism in the context of violent crime. Participants completed a survey assessing their beliefs about crime and gun control attitudes, and those who viewed crime as increasing were also more optimistic about their chances of avoiding violent crime.

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 9月 26日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 国際基督教大学大学院

氏 名 雨宮 伶



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The ISSP 13 th World Congress of Sport Psychology 国際スポーツ心理学会第13回大会
公式ホームページ URL	http://www.issp2013.com/en/
開催期間	2013年 7月 21日 ~ 2013年 7月 25日
旅行期間	2013年 7月 20日 ~ 2013年 7月 26日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	China, Beijing, Beijing Sport University 中華人民共和国, 北京市, 北京体育大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	雨宮 伶 (国際基督教大学大学院 アーツ・サイエンス研究科 博士前期課程) 清水 安夫 (国際基督教大学, 教養学部)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Does Alexithymia affect Athletic Burnout through Maladjustment? アレキシサイミアは不適応を媒介して アスリートのバーンアウトを規定するか?
補助金額	50,000 円 (内訳:航空運賃 46,990 円, 大会参加費 23,648 円, 宿泊費 26810 円, ポスター印刷費 1,360 円)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度、申請者の発表に対し、国際会議等参加旅費補助金を給付していただきまして、心より御礼申し上げますとともに、国際会議での活動内容および、その成果をここに報告させていただきたいと思っております。

【活動内容】

2013年7月21日から7月25日にかけて、中華人民共和国・北京市において開催された、The International Society of Sport Psychology 13th World Congress of Sport Psychology (国際スポーツ心理学会第13回大会：以下、ISSPと記述)にて、ポスター発表を行った。申請者の発表日時は7月22日の15時であり、(Topic: Burnout and Overtraining)、発表題目は、“Does Alexithymia affect Athletic Burnout through Maladjustment? (アレキシサイミアは不適応を媒介してアスリートのバーンアウトを規定するか?)”であった。ISSPはスポーツ心理学の領域において、最も権威のある学会の一つであり、学会大会は4年に1度開催されており、今回の学会大会においても、多くの研究者が参加していた。特に、アジア圏で開催されたにも関わらず、欧米諸国から参加していた研究者が多く見受けられ、また同様に、アジア圏の研究者や、博士前期課程・後期課程に所属している若手研究者も積極的に自身の研究テーマを発表しており、日々白熱した議論が展開されていた。また、シンポジウムの発表内容は「メンタルトレーニング」、「指導者との関係性」、「身体活動増加のための行動変容」、「臨床スポーツ心理学」等、スポーツ心理学の幅広い研究領域を網羅している内容であったと感じている。

【発表内容】

申請者は本大会にて、大学生スポーツ競技者のアレキシサイミア傾向が、どのように、所属するスポーツ集団への適応の問題と、バーンアウトの発生に関連するののかという点について、研究発表を行った。本研究の結果から、アレキシサイミア傾向が高い大学生スポーツ競技者は、所属するスポーツ集団内での適応感を高めることが難しく、その結果、バーンアウトを発生させるという、新たなバーンアウトの規定要因を明らかにした。発表時間は1時間であり、参加者が自由に、それぞれの報告者の発表を聞きに足を運ぶという発表形式が取られていた。そのため、専門性の高いディスカッションを行うことができたと感じている。特に、スポーツ競技者のバーンアウトは自殺を規定する要因として報告されており、スポーツ心理学者としては早急に検討することが求められるテーマである。今回の発表を通して、新たなスポーツ競技者のバーンアウト規定要因に関する知見を提供することができたのと同時に、諸外国のスポーツ競技者が抱えるバーンアウトやドロップアウト、自殺の問題について、貴重な意見交換をすることができた。

【その他】

学会期間中には、中華人民共和国の若手研究者や大学院博士課程に所属している学生達、また欧米諸国で著名な研究者との情報交換をする機会に恵まれた。特に、申請者はスポーツ競技者のバーンアウトについて研究を行っているが、学会大会中に、近年のスポーツ競技者のバーンアウト研究において著名なHenrik Gustafsson先生とお会いすることができ、意見交換および個人的なご指導を受ける機会に恵まれた。

【最後に】

この度は、申請者の発表に対し、国際会議等参加費補助金を受理していただきまして、心より御礼申し上げます。今回の経験を、今後の研究活動に生かしていく所存です。ありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年11月5日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
博士課程

氏名 小川 さやか



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 22 st World Congress on Psychosomatic Medicine 第22回世界心身医学会議
公式ホームページ URL	http://www.icpm2013.org/
開催期間	2013年9月12日～2013年9月14日
旅行期間	2013年9月10日～2013年9月16日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Lisbon Marriott Hotel, Lisbon, Portugal (ポルトガル, リスボン, リスボンマリオートホテル)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	小川さやか ¹ , 山崎浩則 ² , 西郷達雄 ² , 服部朝美 ³ , 富家直明 ⁴ , 濱口豊太 ⁵ , 調 漸 ² , 宗像正徳 ³ , 田山淳 ² ¹ 長崎大学医歯薬学総合研究科博士課程, ² 長崎大学保健・医療推進センター, ³ 東北労災病院勤労者予防医療センター, ⁴ 北海道医療大学心理科学部, ⁵ 埼玉県立大学保健医療福祉学部
発表題目 ※正式名と日本語訳	The relationship between Type A behavior pattern and obesity in Japanese workers 日本人勤労者におけるタイプA行動パターンと肥満の関連について
補助金額	100,000円 (内訳 長崎—ポルトガル間の航空券代 235,790円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動報告】

2013年9月12日から14日にかけて、ポルトガルのリスボンにて The 22st World Congress on Psychosomatic Medicine (第22回世界心身医学会議) が開催され、報告者は“The relationship between Type A behavior pattern and obesity in Japanese workers (日本人勤労者におけるタイプA行動パターンと肥満の関連について)”という演題でポスター発表をおこなった。演題発表後は、他の講演やシンポジウム、ポスター発表に参加し、心身医学に関する最近の知見を得ることができた。

本大会では“Psychosomatic Assessment and Integrative Care”をテーマとして、心身医療に携わるさまざまな職種の研究者が世界各地から集い、活発な討論がなされていた。特に今回は心身医学に関するアセスメントや治療技法に関する報告が多々みられ、Update lecturesでは、心身医学のウェルビーイングに関するアセスメントツールを用いた介入や、慢性疾患患者の家族に対する介入が報告されていた。

他にも摂食障害・食行動異常のセッションでは、摂食障害者のQOLについての報告や、拒食症の認知行動増強維持モデルに関する報告等がなされていた。神経画像や神経内分泌学を用いた講演や研究発表も数多くあり、今後臨床心理士も医学的な知識を学ぶ必要性を感じた。また、臨床心理士以外にも医師、看護師、作業療法士、理学療法士等の多職種の参加がみられたことから、今後ますます多職種連携で心身医療を捉える必要があると感じた。

【本研究の成果】

報告者の発表は、2日目の11:00-11:30、16:00-16:30の2回の時間帯におこなわれた。同セッションでは、摂食障害・食行動異常、心血管疾患、癌、糖尿病等の心身医学に関する最近の研究発表がなされていた。

発表内容は、古くから生活習慣病と関連のあるとされているパーソナリティであるタイプA行動パターン (Type A behavior pattern: TABP) と肥満と関連を検討した。2959名の日本人勤労者を対象とした横断調査研究を実施し、多重ロジスティック回帰分析をおこなった結果、さまざまな変数を調整してもTABPおよび食行動異常の早食い、就寝前の食事が高頻度であることが、独立した肥満のリスクファクターとなることが明らかとなった。

在籍時間中には多くの参加者が訪れ、貴重な意見をいただくことができた。今回の国際会議への参加を通して、これまでの研究内容の総括や今後の研究の方向性について改めて考えることができたため、大変有意義な研究発表ができたと感じる。しかしながら、報告者にとっては自身初の国際会議での発表であり、初めての英語でのディスカッションでは、リスニングおよびスピーキングの能力の至らなさを痛感したため、英語力は今後の課題にしたいと思う。

【付記】

この度は、世界心身医学会議への参加にあたりまして、日本心理学会より助成を賜ったことを厚く御礼申し上げます。今回の国際会議から得た成果を、今後の研究に活かし、より一層研究に邁進していく所存です。このような機会を与えてくださった日本心理学会および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年9月28日

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 名古屋大学大学院・研究生

氏 名 濱家 徳子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

<p>会議名称 ※正式名称および 日本語訳</p>	<p>16th European Conference on Developmental Psychology 第16回発達心理学ヨーロッパ会議</p>
<p>公式ホームページ URL</p>	<p>http://www3.unil.ch/wpmu/ecdp2013/</p>
<p>開催期間</p>	<p>2013年9月3日 ～ 2013年9月7日</p>
<p>旅行期間</p>	<p>2013年9月2日 ～ 2013年9月9日</p>
<p>開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記</p>	<p>Switzerland・Lausanne・University of Lausanne スイス・ローザンヌ・ローザンヌ大学</p>
<p>発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記</p>	<p>濱家徳子 (名古屋大学)・氏家達夫 (名古屋大学)・高井次郎 (名古屋大学)・ 岡本ゆかり (カリフォルニア大学)・Patrick Pieng (カリフォルニア大学) Cynthia Harvey (カリフォルニア大学)</p>
<p>発表題目 ※正式名と日本語訳</p>	<p>Cross-cultural comparison of the developmental process of conflict management skills from early childhood to adolescence 早期児童期から青年期における葛藤処理方略の発達過程に関する 比較文化研究</p>
<p>補助金額</p>	<p>100,000円 (内訳 渡航費 175,500円及び宿泊費 76,542円の一部)</p>

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2013年9月3日から9月7日までスイスのローザンヌ大学で開催された **The 16th European Conference on Developmental Psychology** においてポスター発表を行った。以下、本大会での活動と成果について報告する。

活動内容

2013年9月4日(水)13:30から18:00までポスター発表を行った。発表題目は、“**Cross-cultural comparison of the developmental process of conflict management skills from early childhood to adolescence**” (早期児童期から青年期における葛藤処理方略の発達過程に関する比較文化研究)であり、日本、中国、韓国、アメリカの4カ国において行った質問紙調査の結果をもとに、葛藤処理方略の発達過程における文化差についての発表を行った。

成果

発表内容が国際比較を扱ったものだったこともあってか、様々な国の研究者の方に発表に訪れていただいた。今回の国際学会では、日本からの参加者も多かったこともあり、ヨーロッパの研究者の方はもちろん、日本、中国、アメリカの研究者の方からも、貴重なご意見をいただくことができた。特に、国際比較研究における研究方法や分析方法について貴重なご意見や情報をいただけたことが、今後の研究に大変参考になった。ちょうど、分析方法について再検討していたこともあり、学会でご意見をいただいたことで、今後の見通しを立てることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができた。また、帰国後も電子メールで研究内容についての質問も寄せられ、そこでも情報交換を行うことができ、貴重なご意見を頂くことができた。発表の際にいただいたご意見は、非常によい刺激となり、研究に対するモチベーションへの大きな力となった。

また、他の研究者の方が行っているシンポジウムやポスター発表にも参加させていただいたが、若手研究者向けのプレゼンテーションの仕方を扱ったものもあった。そこでのプレゼンテーションの仕方の説明は非常に分かりやすく、今後の研究や口頭発表に役立つことばかりで大変参考になった。

付記

この度は、国際学会等参加旅費補助金の対象研究として、採択していただきまして心より感謝申し上げます。今回の国際学会から得た経験を、今後の研究活動に活かしていきたいと思っております。本当にありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 10月 29日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 東京大学大学院 教育学研究科
総合教育科学専攻 修士課程2年

氏 名 利根川 明子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	15th Biennial Conference of EARLI (European Association for Research on Learning and Instruction) ヨーロッパ教授学習学会第15回大会
公式ホームページ URL	http://www.earli2013.org/
開催期間	2013年 8月 27日 ~ 2013年 8月 31日
旅行期間	2013年 8月 26日 ~ 2013年 9月 3日 (申請書では旅行期間を9月2日までとしていましたが、予定していた便の 座席予約が埋まっていたため、滞在期間を延長致しました)
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Technische Universität München, München, Germany ドイツ, ミュンヘン, ミュンヘン工科大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	利根川明子 (東京大学), 上淵寿 (東京学芸大学)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Children's regulation to/by others in the classroom: Peer interactions in classroom discourse. 教室における児童の他者制御: 児童間の相互作用に着目して
補助金額	100,000円 (内訳 航空券旅費及び宿泊費の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、日本心理学会より「国際会議等参加旅費補助金」を得て、2013年8月27日～2013年8月31日にドイツ・ミュンヘンで開催されたヨーロッパ教授学習学会第15回大会に参加する機会を得ましたことを心より感謝申し上げます。以下、本補助金の使用状況、発表、及び参加の状況について報告させていただきます。

1. 補助金の使用状況に関する報告

補助を受けた100,000円は、東京⇄ミュンヘン間の航空券旅費155,460円及び8月27日～8月31日の宿泊費300.80ユーロ（領収書添付）の一部として全額使用した。

2. 発表の状況に関する報告

発表は2013年8月28日（11:00～12:30）のThematic Poster（セッションタイトル“Learning Through Interaction and Media”）において行われた。報告者は“Children’s regulation to/by others in the classroom: Peer interactions in classroom discourse.”というタイトルでポスター発表を行った。今回の発表内容は、児童期の教室での教師の感情的足場かけ（emotional scaffolding）の質の違いによって、児童間の相互作用で生じる他者制御（other regulation）の質や児童の感情経験にどのような差異がもたらされるかを検討することを目的として、小学校3年生を対象に準実験計画で実施した。授業中の教師・児童発話及び相互作用、授業後の児童へのアンケート調査を行い、量的・質的に分析し、考察した。

セッション時間には、関心を同じくする海外の研究者との質疑応答が活発に行われた。特に、日本の文化特有の教育実践のあり方をふまえた今後の研究の発展可能性について議論が多く交わされ、自身の今後の研究展望を改めて整理する機会となった。また、文化差や個人差についての検討を加えることでより深い知見を得ることができるのではないかと御指摘をいただき、今後の研究に活かしたいと考えている。同大会に参加する日本人研究者の方も多く聞きにきてくださり、国際学会の場で、領域を越えて日本人研究者の方々と新しいつながりや交流を深めることができたことを嬉しく思った。

3. 参加の状況に関する報告

本学会の大会開催地はヨーロッパであるが、毎年、参加者はヨーロッパのみならず、米国や日本を含む世界各国から教授学習とその関連領域の研究者が集う。今大会のテーマは“responsible teaching and sustainable learning（責任ある教育と持続可能な学習）”であり、教授学習と児童の発達全般に関わる多様なセッションが設けられ、世界各国から2,200人以上が参加した。

報告者は、会期中、主に若手研究者が多く参加するPaper sessions及びPoster sessionsを中心に聴講し、発表者との交流を行った。報告者の研究関心の中心である児童期の教室における感情を取り上げた研究は稀少であったが、関連する領域の研究者の発表から、各領域の最先端の知見や研究手法を学ぶことができた。特に、海外の若手研究者の知見は、このような国際学会の場に赴く事で初めて触れられることが多く、実りの多い時間であった。

また、セッションへの参加を通して、関連する領域の研究者と英語でコミュニケーションを取り、質問や議論をする機会が多くあった。会期中に多くの方とコミュニケーションを取れたことで、英語で発信・議論する力を向上させることができたと思う。日本では英語で議論する場は少なく、こうした国際学会でのコミュニケーションの機会は研究者にとって非常に貴重であると感じている。

国内外の研究者の方々と出会い、直接交流し、議論を深める機会を得たことに感謝したい。今大会で得られた国内外の研究者の方々とつながり、議論を活かしながら、今後の研究の発展を目指したいと考えている。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 9月 10日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 広島大学大学院教育学研究科・院生 (博士課程前期)

氏名 安部 主晃



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	2013 American Psychological 121 st Association Annual Convention 2013年アメリカ心理学会第121回大会
公式ホームページ URL	http://www.apa.org/convention/index.aspx
開催期間	2013年 7月 31日 ~ 2013年 8月 4日
旅行期間	2013年 7月 30日 ~ 2013年 8月 4日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Hawai'i Convention Center in Honolulu, Hawaii アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市, ハワイ・コンベンション・センター
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	安部 主晃 (広島大学大学院教育学研究科) 川人 潤子 (福山大学人間部科学部) 大塚 泰正 (広島大学大学院教育学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	The effects of reassurance-seeking and trait anxiety on depression (再確認傾向と特性不安が抑うつに及ぼす影響)
補助金額	10,000円 (内訳 往復航空運賃)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2013年7月31日～8月4日にかけて、ハワイ・ホノルルで行われた、アメリカ心理学会第121回大会に参加し、ポスター発表を行った。大規模な国際会議であり、世界中で活躍する多くの研究者と交流することができる貴重な体験となった。また、ワークショップやシンポジウムのみならず、Skill-Buildingセッションや、近隣のホテルでの交流会など、様々な企画が催され、多くの学びがあったと同時に、非常に楽しい体験にもなった。

【研究発表】

発表は、**Current Issues in Psychopathology** というセッションにおいて、7月31日の午前9:00～9:50の間に行われた。会議初日の午前中にもかかわらず、ポスター発表の会場には多くの参加者がポスターを見に来ていた。私の発表内容は、自分の価値が認められているかを、重要な他者に繰り返し確認する「再確認傾向」が、抑うつに影響するプロセスを検討したものであった。従来の研究では、再確認傾向が重要他者からの拒絶や対人ストレスイベントを媒介して抑うつにつながる事が示唆されている。本研究では、再確認傾向と特性不安との関連に注目し、再確認傾向が対人ストレスイベントを介して抑うつに影響を及ぼすモデルに、特性不安を取り入れて検討を行った。その結果、再確認傾向は特性不安との関連が強く、対人ストレスイベントから抑うつに及ぼす影響力よりも、特性不安から抑うつに及ぼす影響力が強いことが示された。すなわち、再確認傾向は、対人的なプロセスのみならず、特性不安など個人内のプロセスによって抑うつに強く影響している可能性が示唆された。そのため、今後は特性不安の影響を考慮したうえで、既存のモデルをより厳密に検討していく必要があると考えられる。

【成果】

ポスター発表では、十数名の方に発表を聴きに来て頂いた。海外における、再確認傾向についての研究の動向など、多くの助言を頂き、今後の研究にとって大変参考となった。特に、階層的線形モデリング (HLM) など、縦断データを柔軟に扱える分析手法についての議論では、私の気づかなかった問題点などを指摘して頂き、非常に学ぶものが多かった。また近年、再確認傾向は不安の分野でも様々な研究が進められており、興味深いテーマだと励まして頂くこともあった。今回の発表を機に、日本ではなかなか得られないであろう、幅広い視点からの意見を頂くことができ、海外での研究発表の重要性を学ぶことができた。今後は、自分の研究テーマに関する海外の知見も十分に把握したうえで、さらなる知見を積み重ねられるよう、意欲的に研究を進めていきたい。

また、他の研究者のポスター発表を聴き、英語によるプレゼンテーションの技術が、発表の出来を大きく左右することも学んだ。明確で、要点をわかりやすく伝えている発表者の所には多くの聴き手が集まり、レベルの高い専門的な議論が活発に行われていた。私自身、未熟な英語力とプレゼンテーションで、聴き手との議論が深まりにくい場面があったことは大きな反省である。聴き手とよりレベルの高い議論をするためにも、英語力やプレゼンテーション技術の向上もよりいっそう心がけていきたい。

最後に、今回の会議への参加にあたり、助成して頂いた日本心理学会、および学会関係者の方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 11月 11日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 文京学院大学大学院
人間学研究科心理学専攻修士課程1年

氏 名 伏田 幸平



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Society for Psychophysiological Research 53rd Annual Meeting 第53回 精神生理学会
公式ホームページ URL	http://www.sprweb.org/meeting/2013/highlights.cfm
開催期間	2013年 10月 2日 ~ 2013年 10月 6日
旅行期間	2013年 9月 30日 ~ 年 10月 7日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Firenze Fiera Congress & Exhibition Center Florence, Firenze, Italy イタリア・フィレンツェ・フィレンツェコンベンションセンター
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	伏田幸平(文京学院大学大学院 人間学研究科) / 渡邊翔太(文京学院大学大学院 人間学研究科) 大森駿哉(文京学院大学大学院 人間学研究科) / 武野享輔(文京学院大学大学院 人間学研究科) 東條友里恵(文京学院大学大学院 人間学研究科) / 中尾彩子(文京学院大学 人間学部) 長野祐一郎(文京学院大学 人間学部) / 小林剛史(文京学院大学 人間学部)
発表題目 ※正式名と日本語訳	THE NUMBER OF PLAYERS IN COMPETITIVE VIDEO GAMES: EFFECTS ON AUTONOMIC ACTIVITIES AND SUBJECTIVE AFFECT ゲームプレイ時における競争相手の人数が自律系生理反応・主観的楽しさに及ぼす影響
補助金額	100,00 円 (内訳航空券および宿泊費の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

貴学会の国際会議旅費補助金を受け、2013年10月2日～6日にフィレンツェコンベンションセンターで開催された第53回 SPR 学会(Society for Psychophysiological Research 53rd Annual Meeting)に参加し、研究発表を行った。以下に、参加状況を報告する。

補助金の使用状況

補助を受けた100,000円は航空券および宿泊日(合計188,000円)の一部として全額使用した。

発表に関して

発表は2013年10月3日に行われた。発表題目は”THE NUMBER OF PLAYERS IN COMPETITIVE VIDEO GAMES: EFFECTS ON AUTONOMIC ACTIVITIES AND SUBJECTIVE AFFECT (日本語題目:ゲームプレイ時における競争相手の人数が自律系生理反応・主観的楽しさに及ぼす影響)”であり、ポスター形式で発表を行った。

発表に関する成果

今回の発表では、主に自律系生理指標を扱っている先生方から、大変貴重なご意見をいただくことが出来た。特に、近年、競争場面における生体反応の検討を行っている海外研究者2名とは、30分近くに渡って意見交換を行った。その際に指摘された点は、今後研究を進展させる上で大変重要なものであり、今回の学会で得た一番の成果であったと言える。また、医学領域の先生から神経系システムに関する助言をいただくこともでき、心理学分野という一つの領域で学ぶより、さらに詳細な知識を得ることができた。この他にも、中枢系神経をご専門にされている先生や、国内の先生方からもご意見を頂くことができ、大変有意義な発表となった。

加えて、帰国後にメールで連絡を下さった先生がいらっしやったことも、特筆すべき点であろう。今回発表した研究に類似した研究を行う予定、ということで、こちらから本研究に関する資料をお送りした。今後、なんらかの形で関係を保ち、研究活動の発展、さらには、精神生理学の発展に繋がればと考えている。

以上のことから、本研究に対する考察をより深める機会となり、また、国内において自律系生理指標を用いて競争場面を検討している研究者が少ないことを鑑みると、国際学会ならではの貴重な体験を得ることが出来たのではと考えている。

参加に関して

会期中は、主にシンポジウムに参加していた。英語に不慣れであったが、全てのプレゼンテーションは大変わかりやすく説明され、研究手法に関するだけでなく、発表方法に関しても勉強になった。また、午後のポスター発表では、自身の研究テーマに近い発表は見当たらなかったものの、国内では取り扱われていないテーマを多く目にする事ができ、大変貴重な時間となった。

付記

最後になりましたが、この度、国際学会への参加旅費補助をしていただきましたことを心より感謝申し上げます。このような貴重な経験を無駄にしないよう、一層の努力を続けていきたいと思っております。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2014年 4月 8日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪市立大学大学院文学研究科
後期博士課程2年

氏名 谷口 友梨



□
下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Fifteenth annual meeting of Society for Personality and Social Psychology (第15回人格社会心理学会)
公式ホームページ URL	http://spspmeeting.org/2014/General-Info.aspx
開催期間	2014年 2月 13日 ~ 2014年 2月 15日
旅行期間	2014年 2月 12日 ~ 2014年 2月 18日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	United States of America, Texas, the Austin Convention Center (アメリカ合衆国・テキサス・オースティン会議場)
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	谷口友梨・池上知子 (大阪市立大学大学院文学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Effects of temporal distance on spontaneous goal and trait inferences (自発的目標、特性推論に対する時間的距離の効果)
補助金額	100,000円 (内訳 往復航空券の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2014年2月13日～15にかけて、アメリカ、テキサス州で開催された **Fifteenth annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology** に参加した。以下に、その成果を報告させていただきます。

補助金の使用に関する報告

補助を受けた100,000円は、伊丹ーオースティンの往復航空費として全額使用した。

大会について

本大会は、参加者が1000人単位となる大規模な学会であり、さまざまな国から多くの研究者が参加していた。また発表内容も基礎的研究から応用研究まで多様であった。私の研究領域である対人認知の分野では、Trope, Y.をはじめとする第一線で活躍されている研究者の方々の話を聞く機会に恵まれた。中でも”Malleable time perceptions and their implications for self-control and goal pursuit”というシンポジウムセッションでは、「時間に対する知覚」に焦点が当てられ、「未来と過去ではどちらの方が近く感じるのか」、ということや「未来とはいつからなのか」といったような興味深い発表を拝見することができた。私も研究において、主観的な時・空間的距離を扱っているが、上記のような研究は日本ではあまり行われていない。そのため、研究テーマに一致したトピックにおける濃密な議論に参加できたということは、今後の研究の発展において、とても有意義なものである。

発表に関する報告

2014年2月15日(18:15～19:45)、Poster Session G – Person Perception / Impression Formation において、”Effects of temporal distance on spontaneous goal and trait inferences”というタイトルにてポスター発表を行った。内容は、他者の行動を観察した際に無自覚・無意図的に生じる他者の目標や特性の推論が、他者との間に知覚された主観的な時間的距離によってどのように影響を受けるかを検討したものであった。同セッションで約350のポスター研究発表があった。この発表において、日本や海外の研究者の方から質問を受けたり、議論をすることができた。これらの議論によって、今後の研究のヒントを得ることができた。ただし、私の英語での会話能力はやや不十分であったため、英語における深い議論をすることができなかった。この点については、今後の課題である。

付記

日本心理学会により旅費補助を賜ったことを心より感謝申し上げます。今回、補助をいただけたことで、初めて国際学会に参加することができました。国外の研究者の方の研究に触れ、ディスカッションに参加することができたことは良い経験となりました。今回の経験を生かし、今後の研究活動に励みたいと思います。ありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 8月 28日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名
東京電機大学大学院先端科学技術研究科 博士後期課程

氏 名 福住 紀明



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	5th International Conference on Self-Determination Theory 第5回自己決定理論国際会議
公式ホームページ URL	http://www.sdtconference.org/
開催期間	2013年 6月 27日 ~ 2013年 6月 30日
旅行期間	2013年 6月 25日 ~ 2013年 7月 2日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Rochester Riverside Convention Center, Rochester, NY, USA アメリカ合衆国, ニューヨーク州ローチェスター, ローチェスターリバーサイドコンベンションセンター
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	福住紀明 東京電機大学大学院先端科学技術研究科 山口正二 東京電機大学理工学部
発表題目 ※正式名と日本語訳	The relationships between autonomous school motivation and educational morale in Japanese high school students 日本の高校生における自律的な学校動機づけと 教育的モラルとの関連
補助金額	100,000円 (内訳 航空運賃の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

1. 大会の概要

日本心理学会より国際会議等参加旅費補助金をいただき、2013年6月27日から6月30日にかけて、アメリカ・ローチェスターで開催された5th International Conference on Self-Determination Theory（第5回自己決定理論国際会議）において、ポスター発表を行った。Deci先生とRyan先生が中心となって理論的基礎を築いた、自己決定理論に関する国際会議であった。申請者の発表題目は、"The relationships between autonomous school motivation and educational morale in Japanese high school students"（日本語題目：日本の高校生における自律的な学校動機づけと教育的モラルとの関連）であった。口頭発表が約140件、ポスター発表は約240件であった。規模はそれほど大きくはないが、Deci先生の講演の中で「私たちはfamilyだ」という言葉にあったように、他の参加者と気軽に会話や議論ができるアットホームな雰囲気強い国際会議であった。

2. 発表内容

申請者の発表内容は、日本の高校のトラッキング構造に着目し、自律的な学校動機が教育的モラルに及ぼす影響について検討したものであった。大学進学重視高校では外的調整が学習モラルに負の影響を及ぼすが、就職重視高校では進路意識モラルに負の影響を及ぼした。したがって、進学重視高校では大学進学するために学習に価値が置かれるが、就職重視高校では就職や専門学校や大学進学などの進路選択に幅があることから、進路に価値が置かれている可能性が示唆された。2時間の発表時間に14名ほどの研究者に足を止めていただき、上記の結果を説明することができた。今後の研究の方向性に関して、非常に有益なアドバイスをいただくことができた。また、これまで論文や本の中でしか名前を見たことがない著名な先生と実際に話げできたことは、とても嬉しい経験であった。研究だけでなく、深い議論ができるように英会話能力も向上させたいと強く動機づけられた。

3. 最後に

この度は、申請者の発表に対し、国際会議等参加旅費補助金をいただきまして、日本心理学会及び学会関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。最新の研究や一流の研究者に触れることは、私にとって非常に有意義な経験となりました。今回の経験を自分の研究に生かし、より良い研究ができるように一層努力していきたいと考えております。本当にありがとうございました。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 8月 29日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名
大阪大学人間科学研究科・博士後期課程1年
氏名 松井 智子



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics (第20回国際老年学会) The Annual Meeting of the International Centenarian Consortium (国際百儒者会議)
公式ホームページ URL	http://www.iagg2013.org/ (第20回国際老年学会)
開催期間	2013年 6月 23日 ~ 2013年 6月 27日 / 2013年 6月 27日 ~2013年 6月 29日
旅行期間	2013年 6月 23日 ~ 2013年 6月 30日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	한국・서울・코엑스(Convention and Exhibition Center) 韓国・ソウル・コエックス 한국 순창·순창건강장수 연구소 韓国・淳昌・淳昌健康長寿研究所
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	松井智子 (大阪大学大学院人間科学研究科)、平井啓 (大阪大学大型教育研究プロジェクト 支援室)、松向寺真彩子 (市立豊中病院)、徳山まどか (市立豊中病院) 松井智子 (大阪大学大学院人間科学研究科)・権藤恭之(大阪大学大学院人間科学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Participating motivation for group therapy in cancer patients (がん患者のグ ループ療法への参加動機) The important factors of longevity in centenarian (百寿者の健康長寿の要因)
補助金額	50,0000 円 (内訳 33,990 円 航空券・ 21,052 円 旅行期間 6/23~6/26,6/29 宿泊費の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、国際学会等参加費補助金をいただき、心より感謝申し上げます。補助を受けた 50,000 円は航空券代と宿泊費の一部として全額使用させていただきました。以下、参加学会（The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics：第 20 回国際老年学会：2013 年 6 月 23 日～ 2013 年 6 月 27 日）および参加会議（The Annual Meeting of the International Centenarian Consortium:国際百寿者会議：2013 年 6 月 27 日～2013 年 6 月 30 日）での活動内容を報告いたします。

1. 本大会の様子

The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics は、ソウル（韓国）の Convention and Exhibition Center で開催された。4 年に 1 度開催される国際大会で、日本や韓国等アジアの研究者を中心に、非常に多くの研究者や医療従事者らが参加していた。発表件数は、シンポジウム等の口頭発表が約 811 件、ポスター発表が約 1507 件であった。

The Annual Meeting of the International Centenarian Consortium は、淳昌（韓国）の研修センターで開催された。年に 1 度開催される国際会議で、日本、韓国だけでなく、アメリカやイタリアなどから百寿者の研究者が参加していた。発表件数は、約 15 件であった。

2. 自身の発表に関する報告

The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics

報告者は、6 月 26 日の second round (13:30～14:00) にてポスター発表を行った。発表タイトルは、「Participating motivation for group therapy in cancer patients」であり、がん患者の心理的サポートのひとつであるグループ療法への参加動機をインタビュー調査し内容分析を行った結果から、問題を抱えるがん患者がグループ療法に参加しやすくなるためにどのようなことをすべきかについて主張した。質問者と議論することで、主張ポイントをより明確化できた。また、がん患者を対象とした研究を行っている研究者とも意見をかわすことができ、とても励みになった。

The Annual Meeting of the International Centenarian Consortium

報告者は、6 月 28 日に口頭発表を行った。発表タイトルは、「The important factors of longevity in centenarian」であり、百寿者本人に長寿の秘訣をインタビュー調査し内容分析を行った結果から、百寿者の回答と心の健康を含んだ健康行動などとの関連を示唆した。発表した結果は参加者に興味をもっていただき、特にその中でも食行動の「食べ過ぎないこと」について他国の研究者が共感し議論が深まった。また、この発表は報告者にとって初めての口頭発表（英語）であり、非常に貴重な経験となった。

3. 参加状況に関する報告

国際大会期間中は、Health Promotion、End of Life、centenarian & longevity といった、自身の研究分野、特にがん患者や百寿者を対象としている研究について、心理学から社会学、そして医療やケアやサポートなどに関する様々なシンポジウムに積極的に参加した。研究内容から新たな知見や気づきを得ただけでなく、多くのプレゼンテーションを見る事で魅力的なプレゼンテーションの仕方についても勉強となった。また、ポスターセッションでは報告数が非常に多かったため、全てを見る事はできなかったが自身に関連のある報告を見てまわった。そして、発表者に質問したり、意見交換をしたりし、有意義な時間を過ごすことができた。国際会議では、全ての発表を聞き、他国における百寿者研究の現状を知った。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 8月 10日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪大学大学院人間科学研究科
博士前期課程・学生

氏名 久保田 彩



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	Association for Death Education and Counseling 35th Annual Conference 死の教育とカウンセリング学会(アメリカ死生学会) 第35回年次大会
公式ホームページ URL	http://conf2013.adec.org//AM/Template.cfm?Section=Annual_Conference_2013
開催期間	2013年 4月 24日 ~ 2013年 4月 27日
旅行期間	2013年 4月 24日 ~ 2013年 4月 30日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	United States of America, CA, Hollywood, Loews Hollywood Hotel アメリカ合衆国・カリフォルニア州ハリウッド・ロウズハリウッドホテル
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	久保田 彩(大阪大学大学院人間科学研究科)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Measuring the anxiety for loss of loved one in Japan 日本語版他者の死に対する不安尺度の作成
補助金額	100,000円(内訳:宿泊費 63,405円,国内外交通費 27,101円,大会参加費 26,854円の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー, および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は, その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

報告者は、貴学会の国際会議等参加旅費補助金を受け、2013年4月にアメリカ合衆国 Hollywood で開催された Association for Death Education and Counseling (以下、ADEC) の第35回年次大会に参加し、研究発表を行いました。以下、その内容について報告致します。

【学会について】

ADEC は、死別や終末期の問題、死への準備教育といったテーマの研究を主に扱う学会であり、学会の規模としては比較的小規模であるが(本年度:ポスター発表約80件、実践報告及び口頭発表約100件)、本分野では最大規模のよく知られた学会である。アメリカ合衆国・カナダをはじめ、ヨーロッパやアジアからの参加者もあり、各国の研究者と意見を交わすことのできる場となっている。

【報告者の研究発表】

報告者は、大会2日目の午後にポスター発表を行い、各国で翻訳されている"Collett-Lester Fear of death scale"の日本語版の信頼性・妥当性に関して報告を行った。本尺度は、自己及び他者の死に対する不安を測定する尺度であり、近年、例えば、他者の死に接する機会が多い医療関係者を対象とした研究において着目されている。会場がそれほど大きくなかったこともあり、ポスターの前を通られた参加者には、必ず声をかけるように心がけた。日本からの発表者が極めて少ないためか、文化差に関する質問を多く頂いた。その中で、今回の研究から直接言及することが難しいが、非常に興味深い指摘を受けた。今回発表した尺度の中に、分析の過程で先行研究とは大きく異なる振る舞いをした「罪悪感」に関する項目があったのだが、アメリカやヒスパニック系の国出身の方が、「この感覚はとてもよくわかる」と言われた一方で、中国・韓国出身の方には「意味がわからない」と指摘されたのである。この違いを単純に文化差に帰することはできないが、何らかの違いが存在する可能性を体感できたことは有意義であった。また、英語での発表に不安を覚えることもあり、ハンドアウトは論文に近いような形で作成した。事前に75部準備するようという指定があったが、そのほとんどを受け取って頂いた。ハンドアウトは読みやすいと肯定的な評価を頂き、在籍時間以外の時間にも、ハンドアウトを通じて議論をすることができた。

【その他の発表・活動】

学会の Opening Ceremony では、この1年に亡くなられた会員の方の紹介と黙とうがあり、この学会ならではの経験となった。また、本年度の学会賞を受賞された Grollman E.A. 先生のビデオレターはとても心に残るもので、「この分野に携わる人は、"Keeper of tears"であるべき」という言葉は、今後研究を進めていく上での覚悟を改めて確認する良い機会となった。プログラムの内容はどれも興味深いものであったが、中でも2点大きく得るものがあった。まず、DSM-Vにおける悲嘆の扱いのような最新の知見に触れることができた。また、学会誌を読むだけではなかなか掴みがたい研究の背後にある地域の特性や、海外での高齢者施設での現状といった生の情報に触れることができた。

これら公的なプログラム以外にも、学会中に出会った研究者の方に昼食や夕食に誘って頂き、現在行っている研究内容や研究に対する考え方も伺い、非常に充実した時間を過ごすことができた。初めての国際学会、単身での参加ということもあり、当初は不安に思うことも多々あったが、研究者が多いとは言えない本分野で、関心を共有する方の存在を身近に感じネットワークを広げることができたことで、今後の研究の精神的な基盤を得ることができたように感じる。

最後になりましたが、ADEC 第35回年次大会への参加にあたり、多大なるご支援を下さった日本心理学会、学会関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。今回の経験を自身の研究生活に生かし、より一層深く研究に取り組んでいく所存です。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 10月 2日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 大阪府立大学大学院人間社会学研究科
博士後期課程

氏 名 森 兼 隆



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	The 15th Biennial Conference of the European Association for Research in Learning and Instruction (EARLI) 第15回 ヨーロッパ学習教授学会
公式ホームページ URL	http://www.earli2013.org/
開催期間	2013年 8月 27日 ~ 2013年 8月 31日
旅行期間	2013年 8月 26日 ~ 2013年 9月 2日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Germany・Munich・Technische Universität München (TUM) ドイツ・ミュンヘン・ミュンヘン工科大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	森 兼隆 (大阪府立大学大学院人間社会学研究科) 岡本 真彦 (大阪府立大学)
発表題目 ※正式名と日本語訳	Executive Functions in Integration Process of Arithmetic Word Problems: Focusing the Updating 算数文章題解決の統合過程における実行機能：更新に焦点を当てて
補助金額	100,000円 (内訳 航空券代金 ¥158,090 の一部として)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー，および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、申請者の第 15 回 EARLI 学会の参加に対し、国際会議等参加旅費補助金をいただいたことを心より感謝申し上げます。以下、当学会での活動内容、並びにその成果を報告させていただきます。

【活動内容】

ドイツ、ミュンヘンにあるミュンヘン工科大学にて、8 月 27 日から 31 日にかけて、The 15th Biennial Conference of the European Association for Research in Learning and Instruction (EARLI) (第 15 回 ヨーロッパ学習教授学会) が開催された。ミュンヘン工科大学はミュンヘン中央駅から徒歩 20 分程度であり、いくつかの美術館に囲まれる閑静な場所に所在していた。

申請者は **Executive Functions in Integration Process of Arithmetic Word Problems: Focusing the Updating** (算数文章題解決の統合過程における実行機能：更新に焦点を当てて) という題目で、ポスター発表を行った。申請者の発表日時は、現地時間 8 月 28 日 11 時から 12 時 30 分だった。この学会のポスター発表はテーマごとに 6 人程度にまとめられており、発表時間の前半には、各ポスターの発表者によって 5 分程度ずつ口頭での概説が行われた。申請者が発表したグループのテーマは **Mathematics Education** だった。

【発表の成果】

申請者の発表は、算数文章題における統合過程と実行機能の 1 つである更新機能との関わりを明らかにするものだった。申請者の研究結果は、過剰情報を含んだ問題と含んでいない問題での統合にかかる時間を比較すると、過剰情報を含んだ問題の方が統合にかかる時間は長くなることを示すとともに、更新機能の高い群では低い群に比べてその伸び方が短いというものだった。すなわち、過剰情報による統合への影響が更新機能の高低によって変化するというを示唆する研究結果だった。このことは、算数文章題を解く際の統合過程において更新機能が重要な働きを果たしているということを示唆するものだった。

申請者の研究は、算数文章題解決中の特定のプロセスにおけるワーキングメモリの働きを明らかにする研究であると言える。算数とワーキングメモリの関連に注目する研究は海外において、いくつかのセッションを成立させるほど勢いのある分野である。そうした研究の多くは、様々なワーキングメモリ課題の成績が算数や知能検査課題の成績をどのように予測するのかということ进行调查している。また、海外では介入によってワーキングメモリの機能を向上させようという潮流もあるということを感じた。こういった現状の中で申請者の研究結果が興味深く受け取られるということを実感できた。その理由には、何人もの研究者が申請者の発表を聞いてもらうことができたということがある。この大会発表という機会を生かし、自分の研究を認知してもらうことができたと言える。

【大会の方式】

テーマで少人数に区切った発表のスタイルは、ポスター発表者同士が議論を交わすことができる点において魅力的であった。同じ興味関心を持つものが同時に発表者としてポスターにつくことができるが、それではお互いの発表を聞くことができない。しかし、発表時間の前半を使い概説と質問できる場を用意することは、類似した問題に関心をもつ発表者がお互いに発表を聞くために有効であると感じた。また、発表者同士のコンネクションを促進するという大会側の工夫を感じた。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2013年 8月 30日
(西暦で記入のこと)

日本心理学会理事長 殿

所属機関・職名 中央大学大学院文学研究科心理学専攻

氏名 弘光 健太郎



下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	International Neuropsychological Society 2013 Mid-Year Meeting 国際神経心理学会
公式ホームページ URL	http://www.ins-amsterdam2013.nl/home.php
開催期間	2013年 7月 10日 ~ 2013年 7月 13日
旅行期間	2013年 7月 9日 ~ 2013年 7月 14日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Hilton Amsterdam Hotel, Amsterdam, The Netherland オランダ, アムステルダム, ヒルトンアムステルダムホテル
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	*弘光健太郎 (中央大学大学院文学研究科心理学専攻) 篠浦伸禎 (都立駒込病院脳神経外科) 糸井千尋 (中央大学大学院文学研究科心理学専攻) 山田良治 (都立駒込病院脳神経外科) 斎藤聖子 (中央大学大学院文学研究科心理学専攻) 緑川晶 (中央大学文学部) *：発表者。
発表題目 ※正式名と日本語訳	Religious experiences and out-of-body experiences during awake surgery 覚醒下手術中における宗教的体験と体外離脱体験
補助金額	100,000 円 (内訳 往復航空券代 ¥132,580 の一部)

- 1 会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピー、および旅費等の領収書原本を添付して下さい。
- 2 申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

申請者は、2013年7月10~13日にオランダ・アムステルダム、ヒルトンアムステルダムホテルにて開催された International Neuropsychological Society 2013 Mid-Year Meeting においてポスター発表をおこなった。

■発表概要

申請者のポスター発表は2013年7月13日9:45~11:15AMにPoster Session6: Epilepsy/Medical/Schizophrenia/TBI(Adult)のセッションにおいて行われ、そのタイトルは、Religious experiences and out-of-body experiences during awake surgery (覚醒下手術中における宗教的体験と体外離脱体験)であった。今回の発表内容は、従来側頭葉てんかんの発作的症状や精神疾患の症状として報告されてきた宗教的体験と体外離脱体験に関するものであり、これらの症状が脳腫瘍切除を目的とした覚醒下手術中に発現した症例の報告及びその責任領域に言及したものである。患者は59歳男性左利きで左側頭葉深部に腫瘍あり。てんかんの発作症状はなし。術中、眩しい光が見えると報告。その背後に「神様」がいるという発言があった。その後手術室ではない別のところにいたという一種の体外離脱体験を報告。これらの症状が発現したときの術部が帯状回付近であったことを踏まえると、帯状回領域または帯状回とそれを含む神経回路が宗教的体験及び体外離脱体験に関連することが考えられた。

■成果

ポスター発表においては、質問者から「これらの症状は本当に帯状回においてのみ発現する症状なのか。」「他の神経学的症状は他にあったのか」などの質問を受け回答した。その他の質問も申請者の考えの及ばないことについてのこともあり、今後の研究に役立つ意義深い意見を多数いただいた。また他の発表者のポスターにおける議論も有意義な内容であった。それと同時に英語での研究に関する発表スキル及び議論のスキルの向上にもつながった点も有意義であった。シンポジウムにおける口頭発表では、神経心理学検査における最新の知見や覚醒下手術に関する研究もあり、申請者の研究に大いに寄与する知見が見受けられ非常に参考になるとともに今後の研究に対する強い動機付けとなった。当該大会のテーマは Evidence-Based Neuropsychology であり、各国の多岐にわたる分野の着実な研究データや症例に基づいた知見が発表されており、その研究態度や姿勢は今後の申請者の研究の参考となるものであった。

■さいごに

今回の学会参加にあたり、国際会議等参加旅費助成の対象として申請者の研究を採択していただき、日本心理学会のみなさまに心より御礼申し上げます。国際学会に参加して自身の研究を発表し、同時に最新の知接触到することは一研究者として非常に有意義なものでした。この経験を今後の研究に生かし、より一層日々の研究に邁進したいと存じます。ここに深く感謝の意を捧げます。ありがとうございました。